

## サムエル記上

## 第一章

「エフライムの山地のラマタイム・ゾビムに、エルカナという名の人があった。エフライムびとで、エロハムの子であった。エロハムはエリウの子、エリウはトフの子、トフはツフの子である。ニエルカナには、ふたりの妻があつて、ひとりの名はハンナといい、ひとりの名はペニンナと叫んだ。ペニンナには子どもがあつたが、ハンナには子どもがなかった。」

三 この人は年ごとに、その町からシロに上つて行って、万軍の主を拝し、主に犠牲をささげるのを常とした。シロには、エリのふたりの子、ホフニとピネハスとがいて、主に仕える祭司であつた。四 エルカナは、犠牲をささげる日、妻ペニンナとそのむすこ娘にはみな、その分け前を与えた。五 エルカナはハンナを愛していたが、彼女には、ただ一つの分け前を与えるだけであつた。主がその胎を閉ざされたからである。六 また彼女を憎んでいる他の妻は、ひどく彼女を悩まして、主がその胎を閉ざされたことを恨ませようとした。七 こうして年は暮れ、年は明けたが、ハンナが主の宮に上るごとに、ペニンナは彼女を悩ましたので、ハンナは泣いて食ふこともしなかつた。八 夫エルカナは彼女に言った、「ハンナよ、なぜ

泣くのか。なぜ食べないのか。どうして心に悲しむのか。わたしはあなたにとって十人の子どもよりもまさっているではないか」。

九 シロで彼らが飲み食いしたのち、ハンナは立ちあがつた。その時、祭司エリは主の神殿の柱のかたわらの座にすわっていた。一〇 ハンナは心に深く悲しみ、主に祈つて、はげしく泣いた。二そして誓いを立てて言った、「万軍の主よ、まことに、はしための悩みをかえりみ、わたしを覚え、はしためを忘れずに、はしために男の子を賜わりますなら、わたしはその子を一生のあいだ主にささげ、かみそりをその頭にあてません」。

三 彼女が主の前で長く祈っていたので、エリは彼女の口に目をとめた。四 ハンナは心のうちで物を言っていたので、くちびるが動くだけで、声は聞えなかつた。それゆえエリは、酔っているのだと思つて、「彼女に言った、「いつまで酔っているのか。酔いをさましたさい」。

五 しかしハンナは答えた、「いいえ、わが主よ。わたしは不幸な女です。六 どう酒も濃い酒も飲んだものではありません。七 ただ主の前に心を注ぎ出していたのです。八 はしためを、悪い女と思わないでください。積る憂いと悩みのゆえに、わたしは今まで物を言っていたのです。九 そこでエリは答えた、「安心して行きなさい。どうかイスラエルの神があなたの求める願いを聞きとどけられるように」。

一〇 彼女は言った、「どうぞ、はしためにも、あなた

の前に恵みを得させてください」。こうして、その女は去って食事し、その顔は、もはや悲しげではなくなつた。

一九 彼らは朝早く起きて、主の前に礼拝し、そして、ラマにある家に帰って行った。エルカナは妻ハンナを知り、主が彼女を顧みられたので、二〇 彼女はみごもり、その時が巡ってきて、男の子を産み、「わたしがこの子を主に求めたからだ」といって、その名をサムエルと名づけた。

三 エルカナその人とその家族とはみな上っていて、年ごとの犠牲と、誓いの供え物とをささげた。三しかしハンナは上って行かず、夫に言った、「わたしはこの子が乳離れしてから、主の前に連れていって、いつまでもそこにおらせましよう」。三三 夫エルカナは彼女に言った、「あなたが良いと思うようにして、この子の乳離れするまで待ちなさい。ただどうか主がその言われたことを実現してくださるように」。こうしてその女はとどまつて、その子に乳をのませ、乳離れするのを待っていたが、三六 乳離れた時、三歳の雄牛一頭、麦粉一エバ、ぶどう酒のはいった皮袋一つを取り、その子を連れて、シロにある主の宮に行った。その子はなお幼かった。三五 そして彼らはその牛を殺し、子供をエリのもとへ連れて行った。三六 ハンナは言った、「わが君よ、あなたは生きておられます。わたしは、かつてここに立って、あなたの前で、主に祈った女です。三七 この子を与えてくださいと、わたしは祈りましたが、主はわたしの求めた願いを聞きとどけ

られました。三八 それゆえ、わたしもこの子を主にささげます。この子は一生のあいだ主にささげたものです」。そして彼らはそこで主を礼拝した。

## 第二章 ハンナは祈って言った、

「わたしの心は主によって喜び、

わたしの力は主によって強められた、

わたしの口は敵をあざ笑う、

あなたの救いによってわたしは楽しむからである。

主のように聖なるものはない、

あなたのほかに、だれもない、

われわれの神のような岩はない。

三 あなたがたは重ねて高慢に語ってはならない、

たかぶりの言葉を口にするをやめよ。

主はすべてを知る神であつて、

もろもろのおこないは主によって量られる。

四 勇士の弓は折れ、

弱き者は力を帯びる。

五 飽き足りた者は食のために雇われ、

飢えたものは、もはや飢えることがない。

六 うまずめは七人の子を産み、

多くの子をもつ女は孤独となる。

七 主は殺し、また生かし、

陰府にくだし、また上げられる。

主は貧しくし、また富ませ、

低くし、また高くされる。

八 貧しい者を、ちりのなかから立ちあがらせ、  
乏しい者を、あくたのなかから引き上げて、  
王侯と共にすわらせ、  
栄誉の位を継がせられる。

地の柱は主のものであって、

その柱の上に、世界をすえられたからである。

九 主はその聖徒たちの足を守られる、

しかし悪いものどもは暗黒のうちに滅びる。

人は力をもって勝つことができないからである。

一〇 主と争うものは粉々に碎かれるであらう、

主は彼らにむかつて天から雷をとどろかし、

地のはてまでもさばき、

王に力を与え、

油そそがれた者の力を強くされるであらう。

二 エルカナはラマにある家に帰ったが、幼な子は祭司

エリの前にて主に仕えた。

三 さて、エリの子らは、よこしまな人々で、主を恐れ

なかった。三 民のささげ物についての祭司のならわしは

こうである。人が犠牲をささげる時、その肉を煮る間に、

祭司のしもべは、みつまたの肉刺しを手にとってきて、

四 それをかま、またはなべ、またはおおがま、または鉢

に突きいれ、肉刺しの引き上げるものは祭司がみな自分

のものとした。彼らはシロで、そこに来るすべてのイス

ラエルの人に、このようにした。二五 人々が脂肪を焼く前

にもまた、祭司のしもべがきて、犠牲をささげる人に言

うのであった、「祭司のために焼く肉を与えよ。祭司はあ

なたから煮た肉を受けない。生の肉がよい」。二六 その人

が、「まず脂肪を焼かせましょう。その後ほしだけ取っ

てください」と言うとき、しもべは、「いや、今もらいた

い。くれないなら、わたしは力づくで、それを取ろう」と

と言う。二七 このように、その若者たちの罪は、主の前に

非常に大きかった。この人々が主の供え物を軽んじたか

らである。

一八 サムエルはまだ幼く、身に亜麻布のエポデを着けて、

主の前に仕えていた。一九 母は彼のために小さい上着を作

り、年ごとに、夫と共にその年の犠牲をささげるために

上る時、それを持ってきた。二〇 エリはいつもエルカナと

その妻を祝福して言った、「この女が主にささげた者の

かわりに、主がこの女によつてあなたに子を与えられる

ように」。そして彼らはその家に帰るのを常とした。

三 こうして主がハンナを顧みられたので、ハンナはみ

ごもって、三人の男の子とふたりの女の子を産んだ。わ

らベサムエルは主の前で育った。

三一 エリはひじょうに年をとった。そしてその子らがイ

スラエルの人々にしたいろいろのことを聞き、また会見

の幕屋の入口で勤めていた女たちと寝たことを聞いて、

三二 彼らに言った、「なにゆえ、そのようなことをするのか。



わたしはこのすべての民から、あなたがたの悪いおこないのことを聞く。二四わが子らよ、それはいけない。わたしの聞く、主の民の言いふらしている風説は良くない。二五もし人が人に対して罪を犯すならば、神が仲裁されるであろう。しかし人が主に対して罪を犯すならば、だが、そのとりなしをすることができようか。しかし彼らは父の言うことに耳を傾けようとしなかった。主が彼らを殺そうとされたからである。

二六わらべサムエルは育っていき、主にも、人々にも、ますます愛せられた。

二七このとき、ひとりの神の人が、エリのもとにきて言った、「主はかく仰せられる、『あなたの先祖の家がエジプトでバロの家の奴隷であったとき、わたしはその先祖の家に自らを現した。二八そしてイスラエルのすべての部族のうちからそれを選び出して、わたしの祭司とし、わたしの祭壇に上って、香をたかせ、わたしの前でエポデを着させ、また、イスラエルの人々の火祭をことごとくあなたの先祖の家に与えた。二九それにどうしてあなたがたは、わたしが命じた犠牲と供え物をむさぼりの目をもつて見るのか。またなにゆえ、わたしよりも自分の子らを尊び、わたしの民イスラエルのささげるもろもろの供え物の、最も良き部分をもつて自分を肥やすのか。』三〇それゆえイスラエルの神、主は仰せられる、『わたしはかつて、『あなたの家とあなたの父の家とは、永久にわた

しの前に歩むであろう』と言った。しかし今、主は仰せられる、『決してそうはしない。わたしを尊ぶ者を、わたしは尊び、わたしを卑しめる者は、軽んぜられるであろう。三二見よ、日が来るであろう。その日、わたしはあなたの力と、あなたの父の家の力を断ち、あなたの家に年老いた者をなくするであろう。三三そのとき、あなたは災のうちにあって、イスラエルに与えられるもろもろの繁栄を、ねたみ見るであろう。あなたの家には永久に年老いた者がいなくなるであろう。三三しかしあなたの一族のひとりを、わたしの祭壇から断たないであろう。彼は残されてその目を泣きはらし、心を痛めるであろう。またあなたがたの家に生れ出るものは、みなつるぎに死ぬであろう。三四あなたがたのふたりの子ホフニとビネハスの身にかかることが、あなたがたのためにそのしるしとなるであろう。三五わたしは自分のために、ひとりの忠実な祭司を起す。その人はわたしの心と思いとに従って行うであろう。わたしはその家を確立しよう。その人はわたしが油そそいだ者の前につねに歩むであろう。三六そしてあなたの家で生き残っている人々はみなきて、彼に一枚の銀と一個のパンを請い求め、『どうぞ、わたしを祭司の職の一つに任じ、一口のパンでも食べることができるようになってください』』と云うであろう。』

第三章 一 わらべサムエルは、エリの前で、主

に仕えていた。そのころ、主の言葉はまれで、黙示も常ではなかった。

二 さてエリは、しだいに目がかすんで、見ることでできなくなり、そのとき自分のへやで寝ていた。三 神のともしびはまだ消えず、サムエルが神の箱のある主の神殿に寝ていた時、主は「サムエルよ、サムエルよ」と呼ばれた。彼は「はい、ここにおります」と言つて、五 エリの所へ走つていつて言つた、「あなたがお呼びになりました。わたしは、ここにおります」。しかしエリは言つた、「わたしは呼ばない。帰つて寝なさい」。彼は行つて寝た。六 主はまたかさねて「サムエルよ、サムエルよ」と呼ばれた。サムエルは起きてエリのもとへ行つて言つた、「あなたがお呼びになりました。わたしは、ここにおります」。エリは言つた、「子よ、わたしは呼ばない。もう一度寝なさい」。七 サムエルはまだ主を知らず、主の言葉がまだ彼に現されなかった。八 主はまた三度目にサムエルを呼ばれたので、サムエルは起きてエリのもとへ行つて言つた、「あなたがお呼びになりました。わたしは、ここにおります」。その時、エリは主がわらべを呼ばれたのであることを悟つた。九 そしてエリはサムエルに言つた、「行つて寝なさい。もしあなたを呼ばれたら、『しもべは聞きます。主よ、お話しください』と言いなさい」。サムエルは行つて自分の所で寝た。

一〇 主はきて立ち、前のように、「サムエルよ、サムエル

よ」と呼ばれたので、サムエルは言つた、「しもべは聞きます。お話しください」。二 その時、主はサムエルに言われた、「見よ、わたしはイスラエルのうちに一つの事をする。それを聞く者はみな、耳が二つとも鳴るであろう。三 その日には、わたしが、かつてエリの家について話したことを、はじめから終りまでことごとく、エリに行うであろう。四 わたしはエリに、彼が知っている悪事のゆえに、その家を永久に罰することを告げる。その子らが神をけがしているのに、彼がそれをとめなかったからである。五 それゆえ、わたしはエリの家に誓う。エリの家の悪は、犠牲や供え物をもつてしても、永久にあがなわれないであろう」。

六 サムエルは朝まで寝て、主の宮の戸をあけたが、サムエルはその幻のことをエリに語るのを恐れた。七 しかしエリはサムエルを呼んで言つた、「わが子サムエルよ」。サムエルは言つた、「はい、ここにおります」。八 エリは言つた、「何事をお告げになったのか。隠さず話してください。もしお告げになったことを一つでも隠して、わたしに言わないならば、どうぞ神があなたを罰し、さらに重く罰せられるように」。九 そこでサムエルは、その事をことごとく話して、何も彼に隠さなかった。エリは言つた、「それは主である。どうぞ主が、良いと思うことを行われるように」。

一〇 サムエルは育つていつた。主が彼と共におられて、

その言葉を一つも地に落ちないようにされたので、二〇ダ  
ンからベエルシバまで、イスラエルのすべての人は、サ  
ムエルが主の預言者と定められたことを知った。三主は  
ふたたびシロで現れられた。すなわち主はシロで、主の  
言葉によって、サムエルに自らを現された。こうしてサ  
ムエルの言葉は、あまねくイスラエルの人々に及んだ。

#### 第四章 イスラエルびとは出てペリシテびと

と戦おうとして、エベネゼルのほとりに陣をしき、ペリ  
シテびとはアベクに陣をしいた。ニペリシテびとはイス  
ラエルびとにむかって陣備えをしたが、戦うに及んで、  
イスラエルびとはペリシテびとの前に敗れ、ペリシテび  
とは戦場において、おおよそ四千人を殺した。三民が陣  
営に退いた時、イスラエルの長老たちは言った、「なにゆ  
え、主はきよう、ペリシテびとの前にわれわれを敗られ  
たのか。シロへ行って主の契約の箱をここへ携えてくる  
ことにしよう。そして主をわれわれのうちに迎えて、敵  
の手から救っていただこう」。四そこで民は人をシロにつ  
かわし、ケルビムの上に座しておられる万軍の主の契約  
の箱を、そこから携えてこさせた。その時エリのふたり  
の子、ホフニとピネハスは神の契約の箱と共に、その所  
にいた。

五主の契約の箱が陣営にいた時、イスラエルびとは  
みな大声で叫んだので、地は鳴り響いた。六ペリシテび  
とは、その叫び声を聞いて言った、「へブルびとの陣営の、

この大きな叫び声は何事か」。そして主の箱が、陣営に  
着いたことを知った時、七ペリシテびとは恐れて言った、  
「神々が陣営にきたのだ」。彼らはまた言った、「ああ、わ  
れわれはわざわいである。このようなことは今までな  
かった。ああ、われわれはわざわいである。だれがわれ  
われをこれらの強い神々の手から救い出すことができよ  
うか。これらの神々は、もろもろの災をもつてエジプト  
びとを荒野で撃つたのだ。八ペリシテびとよ、勇気を出  
して男らしくせよ。へブルびとがあなたがたに仕えたよ  
うに、あなたがたが彼らに仕えることのないために、男  
らしく戦え」。

九こうしてペリシテびとが戦ったので、イスラエルび  
とは敗れて、おのおのその家に逃げて帰った。戦死者は  
ひじょうに多く、イスラエルの歩兵で倒れたものは三万  
であつた。一「また神の箱は奪われ、エリのふたりの子、  
ホフニとピネハスは殺された」。

二その日ひとりのベニヤミンびとが、衣服を裂き、頭  
に土をかぶって、戦場から走ってシロにきた。三彼が着  
いたとき、エリは道のかたわらにある自分の座にすわつ  
て待ちかまえていた。その心に神の箱の事を気づかつて  
いたからである。その人が町にはいつて、情報をつたえ  
たので、町はこぞって叫んだ。四エリはその叫び声を聞  
いて言った、「この騒ぎ声は何か」。その人は急いでエリ  
の所へきてエリに告げた。五その時エリは九十八歳で、



その目は固まって見ることができなかった。二六その人はエリに言った、「わたしは戦場からきたものです。きょう戦場からのがれたのです」。エリは言った、「わが子よ、様子はどうかであったか」。二七しらせをもたらししたその人は答えて言った、「イスラエルびとは、ペリシテびとの前から逃げ、民のうちにはまた多くの戦死者があり、あなたのふたりの子、ホフニとピネハスも死に、神の箱は奪われました」。二八彼が神の箱のことを言ったとき、エリはその座から、あおむけに門のかたわらに落ち、首を折って死んだ。老いて身が重かったからである。彼のイスラエルをさばいたのは四十年であった。

二九彼の嫁、ピネハスの妻はみごもって出産の時が近づいていたが、神の箱が奪われたこと、しゅうとと夫が死んだというしらせを聞いたとき、陣痛が起り身をかめて子を産んだ。三〇彼女が死にかかっている時、世話をしていた女が彼女に言った、「恐れることはありません。男の子が生まれました」。しかし彼女は答へもせず、また顧みもしなかった。三二ただ彼女は「栄光はイスラエルを去った」と言って、その子をイカボデと名づけた。これは神の箱の奪われたこと、また彼女のしゅうとと夫のこによるのである。三三彼女はまた、「栄光はイスラエルを去った。神の箱が奪われたからです」と言った。

第五章 一ペリシテびとは神の箱をぶんどって、エベネゼルからアシドドに運んできた。二そしてペリシ

テびとはその神の箱を取ってダゴンの宮に運びこみ、ダゴンのかたわらに置いた。三アシドドの人々が、次の日早く起きて見ると、ダゴンが主の箱の前に、うつむきに地に倒れていたのので、彼らはダゴンを起して、それをもとの所に置いた。四その次の朝また早く起きて見ると、ダゴンはまた、主の箱の前に、うつむきに地に倒れていた。そしてダゴンの頭と両手とは切れて離れ、しきいの上にあり、ダゴンはただ胴体だけとなっていた。五それゆえダゴンの祭司たちやダゴンの宮にはいる人々は、だれも今日にいたるまで、アシドドのダゴンのしきいを踏まない。

六そして主の手はアシドドびとの上にきびしく臨み、主は腫物をもってアシドドとその領域の人々を恐れさせ、また悩まされた。七アシドドの人々は、このありさまを見て言った、「イスラエルの神の箱を、われわれの所に、とどめ置いてはならない。その神の手が、われわれと、われわれの神ダゴンの上にきびしく臨むからである」。八そこで彼らは人をつかわして、ペリシテびとの君たちを集めて言った、「イスラエルの神の箱をどうしましよう」。彼らは言った、「イスラエルの神の箱はガテに移そう」。人々はイスラエルの神の箱をそこに移した。九彼らがそれを移すと、主の手がその町に臨み、非常な騒ぎが起った。そして老若を問わず町の人々を撃たれたので、彼らの身に腫物ができた。一〇そこで人々は神の箱

をエクロンに送ったが、神の箱がエクロンに着いた時、エクロンの人々は叫んで言った、「彼らがイスラエルの神の箱をわれわれの所に移したのは、われわれと民を滅ぼすためである」。そこで彼らは人をつかわして、ペリシテびとの君たちをみな集めて言った、「イスラエルの神の箱を送り出して、もとの所に返し、われわれと民を滅ぼすことのないようになしなう」。恐ろしい騒ぎが町中に起っていたからである。そこには神の手が非常にきびしく臨んでいたので、三死なない人は腫物をもって撃たれ、町の叫びは天に達した。

第六章 主の箱は七か月の間ペリシテびとの地にあった。ニペリシテびとは、祭司や占い師を呼んで言った、「イスラエルの神の箱をどうしましょうか。どのようにして、それをもとの所へ送り返せばよいか告げてくください」。彼らは言った、「イスラエルの神の箱を送り返す時には、それをむなしく返してはならない。必ず彼にとがの供え物をもって償いをしなければならぬ。そうすれば、あなたがたはいやされ、また彼の手がなげあなたがたを離れないかを知ることができるのである」。人々は言った、「われわれが償うとがの供え物には何をしましょうか」。彼らは答えた、「ペリシテびとの君たちの数にしたがって、金の腫物五つと金のねずみ五つである。あなたがたすべてと、君たちに臨んだ災は一つだからである。五それゆえ、あなたがたの腫物の像と、

地を荒すねずみの像を造り、イスラエルの神に栄光を帰するならば、たぶん彼は、あなたがた、およびあなたがたの神々と、あなたがたの地に、その手を加えることを軽くされるであろう。六なにゆえ、あなたがたはエジプトびととバロがその心をかたくなにしたように、自分の心をかたくなにするのか。神が彼らを悩ましたので、彼らは民を行かせ、民は去ったではないか。七それゆえ今、新しい車一両を造り、まだくびきを付けたことのない乳牛二頭をとり、その牛を車につなぎ、そのおのの子牛を乳牛から離して家に連れ帰り、八主の箱をとって、それをその車に載せ、あなたがたがとがの供え物として彼に償う金の作り物を一つの箱におさめてそのかたわらに置き、それを送って去らせなさい。九そして見ていて、それが自分の領地へ行く道を、ベテシメシへ上るならば、この大いなる災を、われわれに下したのは彼である。しかし、そうしない時は、われわれを撃ったのは彼の手ではなく、その事の偶然であったことを知るであろう。一〇人々はそのようにした。すなわち、彼らは二頭の乳牛をとって、これを車につなぎ、そのおのの子牛を家に閉じこめ、二主の箱、および金のねずみと、腫物の像をおさめた箱とを車に載せた。三すると雌牛はまっすぐにベテシメシの方向へ、ひとすじに大路を歩み、鳴きながら進んでいって、右にも左にも曲らなかつた。ペリシテびとの君たちは、ベテシメシの境までそのあとにつ



いていった。<sup>二三</sup>時にベテシメシの人々は谷で小麦を刈り入れていたが、目をあげて、その箱を見、それを迎えて喜んだ。<sup>二四</sup>車はベテシメシびとヨシユアの畑にはいつて、そこにとどまった。その所に大きな石があった。人々は車の本を割り、その雌牛を燔祭として主にささげた。<sup>二五</sup>レビびとは主の箱と、そのかたわらの、金の作り物をおさめた箱を取りおろし、それを大石の上に置いた。そしてベテシメシの人々は、その日、主に燔祭を供え、犠牲をささげた。<sup>二六</sup>ベリシテびとの五人の君たちはこれを見て、その日、エクロンに帰った。

<sup>二七</sup>ベリシテびとが、とがの供え物として、主に償いをした金の腫物は、次のとおりである。すなわちアシドドのために一つ、ガザのために一つ、アシケロンのために一つ、ガテのために一つ、エクロンのために一つであった。<sup>二八</sup>また金のねずみは、城壁をめぐらした町から城壁のない村里にいたるまで、すべて五人の君たちに属するベリシテびとの町の数にしたがつて造った。主の箱をおろした所のかたわらにあった大石は、今日にいたるまで、ベテシメシびとヨシユアの畑にあって、あかしとなっている。

<sup>一九</sup>ベテシメシの人々で主の箱の中を見たものがあつたので、主はこれを撃たれた。すなわち民のうち七十人を撃たれた。主が民を撃って多くの者を殺されたので、民はなげき悲しんだ。<sup>二〇</sup>ベテシメシの人々は言った、「だれ

が、この聖なる神、主の前に立つことができようか。主はわれわれを離れてだれの所へ上って行かれたらよいのか。<sup>三</sup>そして彼らは、使者をキリアテ・ヤリムの人々につかわして言った、「ベリシテびとが主の箱を返したから、下ってきて、それをあなたがたの所へ携え上ってください」。

**第七章** <sup>一</sup>キリアテ・ヤリムの人々は、きて、主の箱を携え上り、丘の上のアビナダブの家に持ってきた。その子エレアザルを聖別して、主の箱を守らせた。<sup>二</sup>その箱は久しくキリアテ・ヤリムにとどまって、二十年を経た。イスラエルの全家は主を慕って嘆いた。

<sup>三</sup>その時サムエルはイスラエルの全家に告げていった、「もし、あなたがたが一心に主に立ち返るのであれば、ほかの神々とアシタロテを、あなたがたのうちから捨て去り、心を主に向け、主にのみ仕えなければならぬ。そうすれば、主はあなたがたをベリシテびとの手から救い出されるであらう」。<sup>四</sup>そこでイスラエルの人々はバアルとアシタロテを捨て去り、ただ主にのみ仕えた。

<sup>五</sup>サムエルはまた言った、「イスラエルびとを、ことごとくミツバに集めなさい。わたしはあなたがたのために主に祈りましょう」。<sup>六</sup>人々はミツバに集まり、水をくんでそれを主の前に注ぎ、その日、断食してその所で言った、「われわれは主に對して罪を犯した」。サムエルはミツバでイスラエルの人々をさばいた。<sup>七</sup>イスラエルの人

人のミヅバに集まったことがベリシテびとに聞えたので、ベリシテびとの君たちは、イスラエルに攻め上ってきた。イスラエルの人々はそれを聞いて、ベリシテびとを恐れた。そしてイスラエルの人々はサムエルに言った、「われわれのため、われわれの神、主に叫ぶことをやめなさい。そうすれば主がベリシテびとの手からわれわれを救い出されるでしょう」。そこでサムエルは乳を飲む小羊一頭をとり、これを全き燔祭として主にささげた。そしてサムエルはイスラエルのために主に叫んだので、主はこれに答えられた。「サムエルが燔祭をささげていた時、ベリシテびとはイスラエルと戦おうとして近づいてきた。しかし主はその日、大いなる雷をベリシテびとの上にとどろかせて、彼らを乱されたので、彼らはイスラエルびとの前に敗れて逃げた。二イスラエルの人々はミヅバを出てベリシテびとを追い、これを撃つて、ベテカルの下まで行った。

三その時サムエルは一つの石をとってミヅバとエシヤナの間にすえ、「主は今に至るまでわれわれを助けられた」と言つて、その名をエベネゼルと名づけた。三こうしてベリシテびとは征服され、ふたたびイスラエルの領地に、はいらなかつた。サムエルの一生の間、主の手が、ベリシテびとを防いだ。四ベリシテびとがイスラエルから取った町々は、エクロンからガテまで、イスラエルにかえり、イスラエルはその周囲の地をもベリシテびとの

手から取りかえした。またイスラエルとアモリびとの間には平和があつた。

五サムエルは一生の間イスラエルをさばいた。二六年ごとにサムエルはベテルとギルガル、およびミヅバを巡つて、その所々でイスラエルをさばき、「セラムに帰った。そこに彼の家があつたからである。その所でも彼はイスラエルをさばき、またそこで主に祭壇を築いた。

第八章 サムエルは年老いて、その子らをイスラエルのさばきづかさとした。二長子の名はヨエルといい、次の子の名はアビヤと言つた。彼らはベエルシバでさばきづかさであつた。三しかしその子らは父の道を歩まないで、利にむかい、まいたいを取つて、さばきを曲げた。

四この時、イスラエルの長老たちはみな集まつてラマにおるサムエルのもとにきて、五言つた、「あなたは年老い、あなたの子たちはあなたの道を歩まない。今ほかの国々のように、われわれをさばく王を、われわれのためを立ててください」。六しかし彼らが、「われわれをさばく王を、われわれに与えよ」と言うのを聞いて、サムエルは喜ばなかつた。そしてサムエルが主に祈ると、七主はサムエルに言われた、「民が、すべてあなたに言う所の声に聞き従いなさい。彼らが捨てるのはあなたではなく、わたしを捨てて、彼らの上にわたしが王であることを認めないのである。八彼らは、わたしがエジプトから連れ

上った日から、きょうまで、わたしを捨ててほかの神々に仕え、さまざまの事をわたしにしたように、あなたにもしているのである。九今その声に聞き従いなさい。ただし、深く彼らを戒めて、彼らを治める王のならわしを彼らに示さなければならぬ」。

一〇サムエルは王を立てることを求める民に主の言葉をことごとく告げて、「二言つた、「あなたがたを治める王のならわしは次のとおりである。彼はあなたがたのむすこを取つて、戦車隊に入れ、騎兵とし、自分の戦車の前に走らせるであろう。三彼はまたそれを千人の長、五十人の長に任じ、またその地を耕させ、その作物を刈らせ、またその武器と戦車の装備を造らせるであろう。三また、あなたがたの娘を取つて、香をつくる者とし、料理をする者とし、パンを焼く者とするであろう。四また、あなたがたの畑とぶどう畑とオリブ畑の最も良い物を取つて、その家来に与え、一五あなたがたの穀物と、ぶどう畑の、十分の一を取つて、その役人と家来に与え、一六また、あなたがたの男女の奴隷および、あなたがたの最も良い牛とろばを取つて、自分のために働かせ、一七また、あなたがたの羊の十分の一を取り、あなたがたは、その奴隷となるであろう。一八そしてその日あなたがたは自分のために選んだ王のゆえに呼ばれるであろう。しかし主はその日にあなたがたに答えられないであろう」。

一九ところが民はサムエルの声に聞き従うことを拒んで

言つた、「いいえ、われわれを治める王がなければならぬ。二〇われわれも他の国々のようになり、王がわれわれをさばき、われわれを率いて、われわれの戦いにたたかうのである。二三サムエルは民の言葉をことごとく聞いて、それを主の耳に告げた。三主はサムエルに言われた、「彼らの声に聞き従い、彼らのために王を立てよ」。サムエルはイスラエルの人々に言つた、「あなたがたは、めいめいその町に帰りなさい」。

第九章 一さて、ベニヤミンの人で、キシという名の裕福な人があつた。キシはアビエルの子、アビエルはゼロルの子、ゼロルはベコラテの子、ベコラテはアビヤの子、アビヤはベニヤミンびとである。ニキシにはサウルという名の子があつた。若くて麗しく、イスラエルの人々のうちに彼よりも麗しい人はなく、民のだれよりも肩から上、背が高かつた。

三サウルの父キシの数頭のろばがいなくなった。そこでキシは、その子サウルに言つた、「しもべをひとり連れて、立つて行き、ろばを捜してきなさい」。四そこでふたりはエフライムの山地を通りすぎ、シャリシヤの地を通り過ぎたけれども見当らず、シャリムの地を通り過ぎたけれどもおらず、ベニヤミンの地を通り過ぎたけれども見当らなかつた。

五彼らがツフの地にきた時、サウルは連れてきたしもべに言つた、「さあ、帰ろう。父は、ろばのことよりも、



われわれのことを心配するだろう」。ところが、しもべは言った、「この町には神の人がおられます。尊い人で、その言われることはみなそのとおりになります。その所へ行きましょう。われわれの出でた旅のことについて何か示されるでしょう」。セサウルはしもべに言った、「しかし行くのであれば、その人に何を贈ろうか。袋のパンはもはや、なくなり、神の人に持っていく贈り物が無い。何かありますか」。ハしもべは、またサウルに答えた、「わたしの手に四分の一シケルの銀があります。わたしはこれを、神の人に与えて、われわれの道を示してもらいましょう」。九 昔イスラエルでは、神に問うために行く時には、こう言った、「さあ、われわれは先見者のところへ行こう」。今の預言者は、昔は先見者といわれていたのである。——「サウルはそのしもべに言った、『それは良い。さあ、行こう』。こうして彼らは、神の人のいるその町へ行った」。

二 彼らは町へ行く坂を上っている時、水をくむために出てくるおとめたちに出会ったので、彼らに言った、「先見者はここにおられますか」。三 おとめたちは答えた、「おられます。ごらんなさい、この先です。急いで行きなさい。民がきょう高き所で犠牲をささげるので、たつた今、町にこられたところです。四 あなたがたは、町にはいるとすぐ、あのかたが高き所に上って食事される前に会えるでしょう。民はあのかたがこられるまでは食事

をしません。あのかたが犠牲を祝福されてから、招かれた人々が食事をするのです。さあ、上っていきなさい。すぐに会えるでしょう」。四 こうして彼らは町に上っていった。そして町の中に、はいろいろとした時、サムエルは高き所に上るため彼らのほうに向かつて出てきた。五 さてサウルが来る一日前に、主はサムエルの耳に告げて言われた、六「あすの今ごろ、あなたの所に、ベニヤミンの地から、ひとりの人をつかわすであろう。あなたはその人に油を注いで、わたしの民イスラエルの君としなさい。彼はわたしの民をペリシテびとの手から救い出すであろう。わたしの民の叫びがわたしに届き、わたしがその悩みを顧みるからである」。七 サムエルがサウルを見た時、主は言われた、「見よ、わたしの言ったのはこの人である。この人がわたしの民を治めるであろう」。八 そのときサウルは、門の中でサムエルに近づいて言った、「先見者の家はどこですか。どうか教えてください」。九 サムエルはサウルに答えた、「わたしはその先見者です。わたしの前に行つて、高き所に上りなさい。あなたがたは、きょう、わたしと一緒に食事しなさい。わたしはあすの朝あなたを帰らせ、あなたの心にあることをみな示しましょう。二〇 三日前に、いなくなったあなたのそばは、もはや見つかったので心にかけてなくてもよろしい。しかしイスラエルのすべての望まじきものはだれのものですか。それはあなたのもの、あなたの父の家のす

べての人のものではありませんか」。三 サウルは答えた、「わたしはイスラエルのうちの最も小さい部族のベニヤミンびとであつて、わたしの一族はまたベニヤミンのどの一族よりも卑しいものではありませんか。どうしてあなたは、そのようなことをわたしに言われるのですか」。

三 サムエルはサウルとそのしもべを導いて、へやにはいり、招かれた三十人ほどのうちの上座にすわらせた。三三 そしてサムエルは料理人に言った、「あなたに渡して、取りのけておくようにと書いておいた分を持ってきなさい」。二四 料理人は、ももとその上の部分を取り上げて、それをサウルの前に置いた。そしてサムエルは言った、「ごらんなさい。取っておいた物が、あなたの前に置かれています。召しあがってください。あなたが客人たちと一緒に食事ができるように、この時まで、あなたのために取っておいたものです」。

こうしてサウルはその日サムエルと一緒に食事をした。二五 そして彼らが高き所を下って町にはいった時、サウルのために屋上に床が設けられ、彼はその上に身を横たえて寝た。二六 そして夜明けになって、サムエルは屋上のサウルに呼ばわって言った、「起きなさい。あなたをお送りします」。サウルは起き上がった。そしてサウルとサムエルのふたりは、共に外に出た。

二七 彼らが町はずれに下った時、サムエルはサウルに言った、「あなたのしもべに先に行くように言いなさい」。

しもべが先に行ったら、あなたは、しばらくここに立ちとどまってください。神の言葉を知らせましよう」。

第一〇章 「その時サムエルは油のびんを取って、サウルの頭に注ぎ、彼に口づけして言った、「主はあなたに油を注いで、その民イスラエルの君とされたではありませんか。あなたは主の民を治め、周囲の敵の手から彼らを救わなければならぬ。主があなたに油を注いで、その嗣業の君とされたことの、しるしは次のとおりです。二 あなたがきょう、わたしを離れて、去って行くとき、ベニヤミンの領地のゼルザにあるラケルの墓のかたわらで、ふたりの人に会うでしょう。そして彼らはあなたに言います、『あなたが捜しに行かれたらばは見つかりました。いま父上は、ろばよりもあなたがたの事を心配して、『わが子のことは、どうしよう』と書いておられます』。三 あなたが、そこからお進んで、タボルのかしの木の所へ行くと、そこでベテルに上って神を拝もうとする三人の者に会うでしょう。ひとりは三頭の子やぎを連れ、ひとりは三つのパンを携え、ひとりは、ぶどう酒のはいった皮袋一つを携えている。四 彼らはあなたにあいさつし、二つのパンをくれるでしょう。あなたはそれを、その手から受けなければならぬ。五 その後、あなたは神のギベアへ行く。そこはベリシテびとの守備兵のいる所である。あなたは其所へ行つて、町にはいる時、立琴、手鼓、笛、琴を執る人々を先に行かせて、預言しながら高

き所から降りてくる一群の預言者に会うでしょう。六その時、主の霊があなたの上にもはげしく下って、あなたは彼らと一緒に預言し、変って新しい人となるでしょう。七これらのしるしが、あなたの身に起ったならば、あなたは手当りしだいになんでもしなさい。神があなたと一緒におられるからです。八あなたはわたしに先立ってギルガルに下らなければなりません。わたしはあなたのもとに下っていつて、燔祭を供え、酬恩祭をささげるでしょう。九わたしはあなたのもとに行つて、あなたのしななければならぬ事をあなたに示すまで、七日のあいだ待たなければなりません」。

九サウルが背をかえしてサムエルを離れたとき、神は彼に新しい心を与えられた。これらのしるしは皆その日に起った。一〇彼らはギベアにきた時、預言者の一群に出会った。そして神の霊が、はげしくサウルの上に下り、彼は彼らのうちについて預言した。一一もとからサウルを知っていた人々はみな、サウルが預言者たちと共に預言するのを見て互に言った、「キシの子に何事が起ったのか。サウルもまた預言者たちのうちにいるのか」。一二その所のひとりの者が答えた、「彼らの父はだれなのか」。それで「サウルもまた預言者たちのうちにいるのか」というのが、ことわざとなった。一三サウルは預言することを終えて、高き所へ行った。

一四サウルのおじが、サウルとそのしもべに言った、

「あなたがたは、どこへ行ったのか。サウルは言った、「ろばを捜しにいったのですが、どこにもいないので、サムエルのもとに行きました」。一五サウルのおじは言った、「サムエルが、どんなことを言ったか、どうぞ話してください」。一六サウルはおじに言った、「ろばが見つかったと、はつきり、わたしたちに言いました」。しかしサムエルが言った王国のことについて、おじには何も告げなかった。

一七さて、サムエルは民をミヅパで主の前に集め、一八イスラエルの人々に言った、「イスラエルの神、主はこう仰せられる、『わたしはイスラエルをエジプトから導き出し、あなたがたをエジプトびとの手、およびすべてあなたがたをしえたげる王国の手から救い出した』。一九しかしあなたがたは、きょう、あなたがたをその悩みと苦しみの中から救われるあなたがたの神を捨て、その上、『いいえ、われわれの上に王を立てよ』と言う。それゆえ今、あなたがたは、部族にしたがい、また氏族にしたがって、主の前に出なさい」。

二〇こうしてサムエルがイスラエルのすべての部族を呼び寄せた時、ベニヤミンの部族が、くじに当たった。三またベニヤミンの部族をその氏族にしたがって呼び寄せた時、マテリの氏族が、くじに当たり、マテリの氏族を人ごとと呼び寄せた時、キシの子サウルが、くじに当たった。しかし人々が彼を捜した時、見つからなかった。二三そこ



でまた主に「その人はここにきていますのですか」と問うと、主は言われた、「彼は荷物の間に隠れている」。三一人は走って行って、彼をそこから連れてきた。彼は民の中に立ったが、肩から上は、民のどの人よりも高かった。二四サムエルはすべての民に言った、「主が選ばれた人をごらんさない。民のうちに彼のような人はいないではありませんか」。民はみな「王万歳」と叫んだ。

三五その時サムエルは王国のならわしを民に語り、それを書にのしして、主の前におさめた。こうしてサムエルはすべての民をそれぞれ家に帰らせた。二六サウルもまたギベアにある彼の家に帰った。そして神にその心を動かされた勇士たちも彼と共に行った。二七しかし、よこしまな人々は「この男がどうしてわれわれを救うことができるよう」と言って、彼を軽んじ、贈り物をしなかった。しかしサウルは黙っていた。

第一一章 アンモンびとナハシは上つてきて、ヤベシ・ギレアデを攻め囲んだ。ヤベシの人々はナハシに言った、「われわれと契約を結びなさい。そうすればわれわれはあなたに仕えます」。しかしアンモンびとナハシは彼らに言った、「次の条件であなたがたと契約を結ぼう。すなわち、わたしが、あなたがたすべての右の目をえぐり取って、全イスラエルをはずかしめるということだ」。三ヤベシの長老たちは彼に言った、「われわれに七日の猶予を与え、イスラエルの全領土に使者を送ること

を許してください。そしてもしわれわれを救う者がいない時は降伏します」。四こうして使者が、サウルのギベアにきて、この事を民の耳に告げたので、民はみな声をあげて泣いた。

五その時サウルは畑から牛のあとについてきた。そしてサウルは言った、「民が泣いているのは、どうしたのか」。人々は彼にヤベシの人々の事を告げた。六サウルがこの言葉を聞いた時、神の霊が激しく彼の上に臨んだので、彼の怒りははなはだしく燃えた。七彼は一くびきの牛をとり、それを切り裂き、使者の手によってイスラエルの全領土に送って言わせた、「だれであってもサウルとサムエルとに従って出ない者は、その牛がこのようににされるであろう」。民は主を恐れて、ひとりのように出てきた。八サウルはベゼクでそれを数えたが、イスラエルの人々は三十万、エダの人々は三万であった。九そして人々は、きた使者たちに言った、「ヤベシ・ギレアデの人にこう言いなさい、『あす、日の暮くなるころ、あなたがたは救を得るであろう』と」。使者が帰って、ヤベシの人々に告げたので、彼らは喜んだ。一〇そこでヤベシの人々は言った、「あす、われわれは降伏します。なんでも、あなたがたが良いと思うことを、われわれにしてください」。二明るる日、サウルは民を三つの部隊に分け、あかつきに敵の陣営に攻め入り、日の暮くなるころまで、アンモンびとを殺した。生き残った者はちりぢ

りになって、ふたり一緒にいるものはなかった。

三その時、民はサムエルに言った、「さきに、『サウルがどうしてわれわれを治めることができようか』と言ったものはだれでしょうか。その人々を引き出して下さい。われわれはその人々を殺します」。三しかしサウルは言った、「主はきよう、イスラエルに救を施されたのですから、きようは人を殺してはなりません」。一四そこでサムエルは民に言った、「さあ、ギルガルへ行って、あそこで王国を一新しよう」。一五こうして民はみなギルガルへ行って、その所で主の前にサウルを王とし、酬恩祭を主の前にささげ、サウルとイスラエルの人々は皆、その所で大いに祝った。

第一二章 サムエルはイスラエルの人々に言った、「見よ、わたしは、あなたがたの言葉に聞き従って、あなたがたの上に王を立てた。二見よ王は今、あなたがたの前に歩む。わたしは年老いて髪は白くなった。わたしの子らもあなたがたと共にいる。わたしは若い時から、きようまで、あなたがたの前に歩んだ。三わたしはここにいる。主の前と、その油そそがれた者の前に、わたしを訴えよ。わたしが、だれの牛を取ったか。だれのろばを取ったか。だれを欺いたか。だれをしえたげたか。だれの手から、まいないを取って、自分の目をくらましたか。もしそのようなことがあれば、わたしはそれを、あなたがたに償おう」。四彼らは言った、「あなたは、われ

われを欺いたことも、しえたげたこともありません。また人の手から何も取ったことはありません。五サムエルは彼らに言った、「あなたがたが、わたしの手のうちに、なんの不正をも見いださないことを、主はあなたがたにあかしされる。その油そそがれた者も、きようそれをあかしする」。彼らは言った、「あかしされます」。

六サムエルは民に言った、「モーセとアロンを立てて、あなたがたの先祖をエジプトの地から導き出された主が証人です。七それゆえ、あなたがたは今、立ちなさい。わたしは主が、あなたがたとあなたがたの先祖のために行われたすべての救のわざについて、主の前に、あなたがたと論じよう。八ヤコブがエジプトに行つて、エジプトびとが、彼らを、しえたげた時、あなたがたの先祖は主に呼ばわったので、主はモーセとアロンをつかわされた。そこで彼らは、あなたがたの先祖をエジプトから導き出して、この所に住ませた。九しかし、彼らがその神、主を忘れたので、主は彼らをハゾルの王ヤビンの軍の長シセラの手に渡し、またペリシテびとの手とモアブの王の手にわたされた。そこで彼らがイスラエルを攻めたので、民は主に呼ばわって言った、『われわれは主を捨て、バアルとアシタロテに仕えて、罪を犯しました。今、われわれを敵の手から救い出してください。われわれはあなたがたに仕えます』。二主はエルバアルとバラクとエフタとサムエルをつかわして、あなたがたを周囲の敵

の手から救い出されたので、あなたがたは安らかに住むことができた。三ところが、アンモンびとの王ナハシが攻めてくるのを見たとき、あなたがたの神、主があなたがたの王であるのに、あなたがたはわたしに、『いいえ、われわれを治める王がなければならぬ』と言った。三それゆえ、今あなたがたの選んだ王、あなたがたが求めた王を見なさい。主はあなたがたの上に王を立てられた。四もし、あなたがたが主を恐れ、主に仕えて、その声に聞き従い、主の戒めにそむかず、あなたがたも、あなたがたを治める王も共に、あなたがたの神、主に従うならば、それで良い。五しかし、もしあなたがたが主の声に聞き従わず、主の戒めにそむくならば、主の手は、あなたがたとあなたがたの王を攻めるであろう。六それゆえ、今、あなたがたは立って、主が、あなたがたの目の前で行われる、この大なる事を見なさい。七きょうは小麦刈の時ではないか。わたしは主に呼ばわるであろう。そのとき主は雷と雨を下して、あなたがたが王を求めて、主の前に犯した罪の大なることを見させ、また知らせられるであろう。八そしてサムエルが主に呼ばわったので、主はその日、雷と雨を下された。民は皆ひじょうに主とサムエルとを恐れた。

一九民はみなサムエルに言った、「しもべらのために、あなたの神、主に祈って、われわれの死なないようにしてください。ださい。われわれは、もろもろの罪を犯した上に、また

王を求めて、悪を加えました」。二〇サムエルは民に言った、「恐れることはない。あなたがたは、このすべての悪をおこなった。しかし主に従うことをやめず、心をつくして主に仕えなさい。三むなしの物に迷って行つてはならない。それは、あなたがたを助けることも救うこともできないむなしものだからである。四主は、その大いなる名のゆえに、その民を捨てられないであろう。主が、あなたがたを自分の民とすることを良しとされるからである。五また、わたしは、あなたがたのために祈ることをやめて主に罪を犯すことは、けつしてしないであろう。わたしはまた良い、正しい道を、あなたがたに教えるであろう。六あなたがたは、ただ主を恐れ、心をつくして、誠実に主に仕えなければならない。そして主がどんなに大きいことをあなたがたのためにされたかを考えなければならない。七しかし、あなたがたが、なおも悪を行うならば、あなたがたも、あなたがたの王も、共に滅ぼされるであろう」。

第一 三章 「サウルは三十歳で王の位につき、二年イスラエルを治めた。

二さてサウルはイスラエルびと三千を選んだ。二千はサウルと共にミクマシ、およびベテルの山地におり、一千はヨナタンと共にベニヤミンのギベアにいた。サウルはその他の民を、おのおの、その天幕に帰らせた。三ヨナタンは、ゲバにあるペリシテびとの守備兵を敗った。



ペリシテびとはそのことを聞いた。そこで、サウルは国中に、あまねく角笛を吹きならして言わせた、「ヘブルびとよ、聞け」。イスラエルの人は皆、サウルがペリシテびとの守備兵を敗ったこと、そしてイスラエルがペリシテびとに憎まれるようになったことを聞いた。こうして民は召されて、ギルガルのサウルのもとに集まった。

五 ペリシテびとはイスラエルと戦うために集まった。戦車三千、騎兵六千、民は浜べの砂のように多かった。彼らは上ってきて、ベテアベンの東のミクマシに陣を張った。六 イスラエルびとは、ひどく圧迫され、味方が危くなったのを見て、ほら穴に、縦穴に、岩に、墓に、たぬ池に身を隠した。七 また、あるヘブルびとはヨルダンを渡って、ガドとギレアデの地へ行った。しかしサウルはなおギルガルにいて、民はみな、ふるえながら彼に従った。

八 サウルは、サムエルが定めたように、七日のあいだ待ったが、サムエルがギルガルにこなかったので、民は彼を離れて散って行った。九 そこでサウルは言った、「燔祭と酬恩祭をわたしの所に持つてきなさい」。こうして彼は燔祭をささげた。一〇 その燔祭をささげ終ると、サムエルがきた。サウルはあいさつをしようと、彼を迎えに出た。二 その時サムエルは言った、「あなたは何をしましたのですか」。サウルは言った、「民はわたしを離れて散って行き、あなたは定まった日のうちにこられないのに、ペ

リシテびとがミクマシに集まったのを見たので、三 わたしは、ペリシテびとが今にも、ギルガルに下ってきて、わたしを襲うかも知れないのに、わたしはまだ主の恵みを求めることをしてはいないと思い、やむを得ず燔祭をささげました」。四 サムエルはサウルに言った、「あなたは愚かなことをした。あなたは、あなたの神、主の命じられた命令を守らなかった。もし守ったならば、主はあなたの王国を長くイスラエルの上に確保されたであろう。五 しかし今は、あなたの王国は続かないであろう。主は自分の心になう人を求めて、その人に民の君となることを命じられた。あなたが主の命じられた事を守らなかったからである」。六 こうしてサムエルは立つて、ギルガルからベニヤミンのギベアに上っていった。

七 サウルは共にいる民を数えてみたが、おおよそ六百人あった。八 サウルとその子ヨナタン、ならびに、共にいる民は、ベニヤミンのゲバにあり、ペリシテびとはミクマシに陣を張っていた。九 そしてペリシテびとの陣から三つの部隊にわかれた略奪隊が出てきて、一部隊はオフラの方に向かって、シユアルの地に行き、一〇 一部隊はベテホロンの方に向かい、一部隊は荒野の方のゼボイムの谷を見おろす境の方に向かった。

一一 そのころ、イスラエルの地にはどこにも鉄工がいなかった。ペリシテびとが「ヘブルびとはつるぎも、やりも造ってはならない」と言ったからである。一二 ただしイ

イスラエルの人は皆、そのすきざき、くわ、おの、かまに刃をつけるときは、ペリシテびとの所へ下つて行つた。三すきざきと、くわのための料金は一ピムであり、おのに刃をつけるのと、とげのあるむちを直すのは三分の一シケルであつた。三それでこの戦いの日には、サウルおよびヨナタンと共にいた民の手には、つるぎもやりもなく、ただサウルとその子ヨナタンとがそれを持っていた。三ペリシテびとの先陣はミクマシの渡りに進み出た。

第一四章 一ある日、サウルの子ヨナタンは、その武器を執る若者に「さあ、われわれは向こう側の、ペリシテびとの先陣へ渡って行こう」と言つた。しかしヨナタンは父には告げなかつた。二サウルはギベアのはずれで、ミグロンにある、さくろの木の下にとどまつていたが、共にいた民はおおよそ六百人であつた。三またアヒヤはエポデを身に着けて共にいた。アヒヤはアヒトブの子、アヒトブはイカボデの兄弟、イカボデはピネハスの子、ピネハスはシロにおいて主の祭司であつたエリの子である。民はヨナタンが出かけたことを知らなかつた。四ヨナタンがペリシテびとの先陣に渡って行こうとする渡りには、一方に険しい岩があり、他方にも険しい岩があり、一方の名をボゼツといい、他方の名をセネと叫ぶ。五岩の一つはミクマシの前にあつて北にあり、一つはゲバの前にあつて南にあつた。六ヨナタンはその武器を執る若者に言つた、「さあ、わ

れわれは、この割礼なき者どもの先陣へ渡って行こう。主がわれわれのために何か行われるであらう。多くの人ももつて救うのも、少ない人をもつて救うのも、主にとっては、なんの妨げもないからである。七武器を執る者は彼に言つた、「あなたの望みどおりにしなさい。わたしは一緒にいます。わたしはあなたと同じ心です」。八ヨナタンはまた言つた、「われわれは、あの人々の所に渡って行って、彼らに身を現そう。九そして、もし彼らがわれわれに、『こちらから行くまで待て』と言うならば、われわれはその場にとどまり、彼らの所に上つていかなのである。一〇しかし、もし彼らが『われわれのところへ上つてこい』と言うならば、われわれは上つて行こう。主が彼らをわれわれの手に渡されるからである。これをもつてしるしとしよう」。二こうしてふたりはペリシテびとの先陣に、その身を現したので、ペリシテびとは言つた、「見よ、ヘブルびとが、隠れていた穴から出てくる」。三先陣の人々はヨナタンと、その武器を執る者に叫んで言つた、「われわれのところの上つてこい。目に、ものを見せてくれよう」。ヨナタンは、その武器を執る者に言つた、「わたしのあとについて上つてきなさい。主は彼らをイスラエルの手に渡されたのだ」。四そしてヨナタンはよじ登り、武器を執る者もそのあとについて登つた。ペリシテびとはヨナタンの前に倒れた。武器を執る者も、あとについて行ってペリシテびとを殺した。一四ヨ

ナタンとその武器を執る者たちが、手始めに殺したものは、おおよそ二十人であつて、このことは一くびきの牛の耕す畑のおおよそ半分の内で行われた。二五そして陣営に在る者、野に在るもの、おおよびすべての民は恐怖に襲われ、先陣のもの、おおよび略奪隊までも、恐れおののいた。また地は震い動き、非常に大きな恐怖となった。

一六ベニヤミンのギベアにいたサウルの番兵たちが見ると、ペリシテびとの群衆はくずれて右往左往していた。二七その時サウルは、共に在る民に言った、「人数を調べて、われわれのうちのだれが行ったかを見よ」。人数を調べたところ、ヨナタンとその武器を執る者たちがそこになかった。一八サウルはアヒヤに言った、「エポデをここに持つてきなさい」。その時、アヒヤはイスラエルの人の前でエポデを身に着けていたからである。一九サウルが祭司に語っている間にも、ペリシテびとの陣営の騒ぎはますます大きくなったので、サウルは祭司に言った、「手を引きなさい」。二〇こうしてサウルおよび共に在る民は皆、集まって戦いに出た。ペリシテびとはつるぎをもつて同志打ちしたので、非常に大きな混乱となった。二一また先にペリシテびとと共にいて、彼らと共に陣営にきていたヘブルびとたちも、翻つてサウルおよびヨナタンと共に在るイスラエルびとにつくようになった。二二またエフライムの山地に身を隠していたイスラエルびとたちも皆、ペリシテびとが逃げると聞いて、彼らもまた戦

いに出て、それを追撃した。二三こうして主はその日イスラエルを救われた。そして戦いはベテアベンに移った。

二四しかしその日イスラエルの人々は苦しんだ。これはサウルが民に誓わせて「夕方まで、わたしが敵にあだを返すまで、食物を食べる者は、のろわれる」と言ったからである。それゆえ民のうちには、ひとりも食物を口にしたものはない。二五ところで、民がみな森の中にはいると、地のおもてに蜜があつた。二六民は森にはいつた時、蜜のしたたっているのを見た。しかしだれもそれを手に取つて口につけるものがなかった。民が誓いを恐れたからである。二七しかしヨナタンは、父が民に誓わせたことを聞かなかつたので、手を伸べてつえの先を蜜ばかりの巢に浸し、手に取つて口につけた。すると彼は目がはつきりした。二八その時、民のひとりと言つた、「あなたの父は、かたく民に誓わせて『きょう、食物を食べる者は、のろわれる』と言われました。それで民は疲れているのです」。二九ヨナタンは言つた、「父は国を悩ませました。ごらんください。この蜜をすこしなめたばかりで、わたしの目がこんなに、はつきりしたではありませんか。三〇まして、民がきょう敵からぶんどつた物を、じゅうぶん食べていたならば、さらに多くのペリシテびとを殺していたでしょうに」。

三一その日イスラエルびとは、ペリシテびとを撃つて、ミクマシからアヤロンに及んだ。そして民は、ひじょう



に疲れたので、三ぶんどり物に、はせかかつて、羊、牛、子牛を取って、それを地の上に殺し、血のままでそれを食べた。三一人々はサウルに言った、「民は血のままで食べて、主に罪を犯しています」。サウルは言った、「あなたがたはそむいている。この所へ、わたしのもとに大きな石をころがしてきなさい」。三四サウルはまた言った、「あなたもわたしは分れて、民の中にはいつて、彼らに言いなさい、『おのおの牛または、羊を引いてきてここでほふって食べなさい。血のままで食べて、主に罪を犯してはならない』。そこで民は皆、その夜、おのおの牛を引いてきて、それを、その所でほふった。三五こうしてサウルは主の一つの祭壇を築いた。これはサウルが主のために築いた最初の祭壇である。

三六サウルは言った、「われわれは夜のうちにペリシテびとを追って下り、夜明けまで彼らをかすめて、ひとりも残らぬようにしよう」。人々は言った、「良いと思われることを、なんでもしてください」。しかし祭司は言った、「われわれは、ここで、神に尋ねましょう」。三七そこでサウルは神に伺った、「わたしはペリシテびとを追って下るべきでしょうか。あなたは彼らをイスラエルの手に渡されるでしょうか」。しかし神はその日は答えられなかった。三八そこでサウルは言った、「民の長たちよ、みなこの所に近よきなさい。あなたがたは、よく見きわめて、きょうのこの罪が起きたわけを知らなければならぬ。

三九イスラエルを救う主は生きておられる。たとい、それがわたしの子ヨナタンであっても、必ず死ななければならぬ」。しかし民のうちにはひとりも、これに答えるものがいなかった。四〇サウルはイスラエルのすべての人に言った、「あなたがたは向こう側にいなさい。わたしとわたしの子ヨナタンはこちら側にいましょう」。民はサウルに言った、「良いと思われることをしてください」。四一そこでサウルは言った、「イスラエルの神、主よ、あなたはきょう、なにゆえしもべに答えられなかったのですか。もしこの罪がわたしにあるか、またはわたしの子ヨナタンにあるのでしたら、イスラエルの神、主よ、ウリムをお与えください。しかし、もしこの罪が、あなたの民イスラエルにあるのでしたらトンミムをお与えください」。こうしてヨナタンとサウルとが、くじに当り、民はのがれた。四二サウルは言った、「わたしは、わたしの子ヨナタンかを決めるために、くじを引きなさい」。くじはヨナタンに当たった。

四三サウルはヨナタンに言った、「あなたがしたことを、わたしに言いなさい」。ヨナタンは言った、「わたしは確かに手にあつたつえの先に少しばかりの蜜をつけて、なめました。わたしはここにいます。死は覚悟しています」。四四サウルは言った、「神がわたしをいくえにも罰してください。さるやうに。ヨナタンよ、あなたは必ず死ななければならぬ」。四五その時、民はサウルに言った、「イス

ラエルのうちにこの大なる勝利をもたらししたヨナタンが死ななければならぬのですか。決してそうではありません。主は生きておられます。ヨナタンの髪の毛一すじも地に落してはなりません。彼は神と共にきょう働いたのです。こうして民はヨナタンを救ったので彼は死を免れた。四六 サウルはペリシテびとを追うことをやめて引きあげ、ペリシテびとはその国へ帰った。

四七 サウルはイスラエルの王となつて、周囲のもろもろの敵、すなわちモアブ、アンモンの人々、エドム、ゾバの王たちおよびペリシテびとと戦い、すべて向かう所で勝利を得た。四八 サウルは勇ましく働き、アマレクびとを撃つて、イスラエルびとを略奪者の手から救い出した。

四九 さて、サウルのむすこたちはヨナタン、エスイ、およびマルキシユアである。ふたりの娘の名は次のとおりである。すなわち姉の名はメラブ、妹の名はミカルである。五〇 サウルの妻の名はアヒノアムといい、アヒマアズの娘である。また軍の長の名はアブネルといい、サウルのおじネルの子である。五一 サウルの父キシとアブネルの父ネルとは、アビエルの子である。

五二 サウルの一生の間、ペリシテびとと激しい戦いがあった。サウルは力の強い人や勇氣のある人を見ることが、それを召しかかえた。

第一 五章 一 さて、サムエルはサウルに言った、「主は、わたしをつかわし、あなたに油をそそいで、そ

の民イスラエルの王とされました。それゆえ、今、主の言葉を聞きなさい。二万軍の主は、こう仰せられる、『わたしは、アマレクがイスラエルにした事、すなわちイスラエルがエジプトから上ってきた時、その途中で敵対したことにについて彼らを罰するであらう。三今、行ってアマレクを撃ち、そのすべての持ち物を滅ぼしつくせ。彼らをゆるすな。男も女も、幼な子も乳飲み子も、牛も羊も、らくだも、ろばも皆、殺せ』。

四 サウルは民を呼び集め、テライムで人数を調べたところ、歩兵は二十万、ユダの人は一万であった。五 そしてサウルはアマレクの町へ行って、谷に兵を伏せた。六 サウルはケニびとに言った、「さあ、あなたがたはアマレクびとを離れて、下って行ってください。彼らと一緒にあなたを滅ぼすようなことがあってはならない。あなたがたは、イスラエルの人々がエジプトから上ってきた時、親切にしてくれたのですから」。そこでケニびとはアマレクびとを離れて行った。七 サウルはアマレクびとを撃つて、ハビラからエジプトの東にあるシユルにまで及んだ。八 そしてアマレクびとの王アガグをいけどり、つるぎをもってその民をことごとく滅ぼした。九 しかしサウルと民はアガグをゆるし、また羊と牛の最も良いものを、肥えたものならびに小羊と、すべての良いものを残し、それらを滅ぼし尽すことを好まず、ただ値うちのない、つまらない物を滅ぼし尽した。

「○その時、主の言葉がサムエルに臨んだ、<sup>一</sup>「わたしはサウルを王としたことを悔いる。彼がそむいて、わたしに従わず、わたしの言葉を行わなかったからである」。サムエルは怒って、夜通し、主に呼ばわった。<sup>三</sup>そして朝サウルに会うため、早く起きたが、サムエルに告げる人があつた、「サウルはカルメルにきて、自分のために戦勝記念碑を建て、身をかえして進み、ギルガルへ下って行きました」。<sup>三</sup>サムエルがサウルのもとへ来ると、サウルは彼に言った、「どうぞ、主があなたを祝福されますように。わたしは主の言葉を実行しました」。<sup>四</sup>サムエルは言った、「それならば、わたしの耳にはいる、この羊の声と、わたしの聞く牛の声は、いったい、なんですか」。<sup>五</sup>サウルは言った、「人々がアマレクびとの所から引いてきたのです。民は、あなたの神、主にささげるために、羊と牛の最も良いものを残したのです。そのほかは、われわれが滅ぼし尽しました」。<sup>六</sup>サムエルはサウルに言った、「おやめなさい。昨夜、主がわたしに言われたことを、あなたに告げましょう」。サウルは彼に言った、「言うてください」。

<sup>七</sup>サムエルは言った、「たとい、自分では小さいと思つても、あなたはイスラエルの諸部族の長ではありませんか。主はあなたに油を注いでイスラエルの王とされた。さとして主はあなたに使命を授け、つかわして言われた、『行つて、罪びとなるアマレクびとを滅ぼし尽せ。彼らを

皆殺しにするまで戦え』。<sup>九</sup>それであるのに、どうしてあなたは主の声に聞き従わないで、ぶんどり物にとびかかり、主の目の前に悪をおこなったのですか」。<sup>一〇</sup>サウルはサムエルに言った、「わたしは主の声に聞き従い、主がつかわされた使命を帯びて行き、アマレクの王アガグを連れてきて、アマレクびとを滅ぼし尽しました。<sup>三</sup>しかし民は滅ぼし尽すべきもののうち最も良いものを、ギルガルで、あなたの神、主にささげるため、ぶんどり物のうちから羊と牛を取りました」。<sup>三</sup>サムエルは言った、

「主はそのみ言葉に聞き従う事を喜ばれるように、燔祭や犠牲を喜ばれるであろうか。アガグの血を見よ、従うことは犠牲にまさり、聞くことは雄羊の脂肪にまさる。

<sup>三</sup>そむくことは占いの罪に等しく、強情は偶像礼拝の罪に等しいからである。

あなたが主のことは捨てたので、主もまたあなたを捨てて、王の位から退けられた」。

<sup>四</sup>サウルはサムエルに言った、「わたしは主の命令とあなたの言葉にそむいて罪を犯しました。民を恐れて、その声に聞き従ったからです。<sup>五</sup>どうぞ、今わたしの罪をゆるし、わたしと一緒に帰って、主を拜ませてください」。<sup>六</sup>サムエルはサウルに言った、「あなたと一緒に帰りません。あなたが主の言葉を捨てたので、主もあなたを捨てて、イスラエルの王位から退けられたからです」。



ニ七 こうしてサムエルが去ろうとして身をかえした時、サウルがサムエルの上着のすそを捕えたので、それは裂けた。ニ八 サムエルは彼に言った、「主はきよう、あなたからイスラエルの王国を裂き、もっと良いあなたの隣人に与えられた。ニ九 またイスラエルの栄光は偽ることもなく、悔いることもない。彼は人ではないから悔いることはない。三〇 サウルは言った、「わたしは罪を犯しましたが、どうぞ、民の長老たち、およびイスラエルの前で、わたしを尊び、わたしと一緒に帰って、あなたの神、主を拜ませてください」。三一 そこでサムエルはサウルのあとについて帰った。そしてサウルは主を拜んだ。

三二 時にサムエルは言った、「わたしの所にアマレクびとの王アガグを引いてきなさい」。アガグはうれしそうにサムエルの所にきた。アガグは「死の苦しみはきつと過ぎ去ったのだ」と思った。三三 サムエルは言った、「あなたのつるぎは多くの女に子供を失わせた。そのようにあなたの母も女のうちに最も無惨に子供を失う者となるであらう」。サムエルはギルガルで主の前に、アガグを寸断した。

三四 そしてサムエルはラマに行き、サウルは故郷のギベアに上って、その家に帰った。三五 サムエルは死ぬ日まで、二度とサウルを見なかった。しかしサムエルはサウルのために悲しんだ。また主はサウルをイスラエルの王としたことを悔いられた。

第一 六章 「さて主はサムエルに言われた、「わた

しがすでにサウルを捨てて、イスラエルの王位から退けたのに、あなたはいつまで彼のために悲しむのか。角に油を満たし、それをもって行きなさい。あなたをベツレヘムびとエッサイのもとにつかわします。わたしはその子たちのうちにひとりの王を捜し得たからである」。ニ サムエルは言った、「どうしてわたしは行くことができましよう。サウルがそれを聞けば、わたしを殺すでしょう」。主は言われた、「一頭の子牛を引いて行って、『主に犠牲をささげるためにきました』と言いなさい。三 そしてエッサイを犠牲の場所に呼びなさい。その時わたしはあなたのすることを示します。わたしがあなたに告げる人に油を注がなければならぬ」。四 サムエルは主が命じられたようにして、ベツレヘムへ行った。町の長老たちは、恐れながら出て、彼を迎え、「穏やかな事のためにこられたのですか」と言った。五 サムエルは言った、「穏やかな事のためです。わたしは主に犠牲をささげるためにきました。身をきよめて、犠牲の場所にわたしと共にきてください」。そしてサムエルはエッサイとその子たちをきよめて犠牲の場に招いた。

六 彼らがきた時、サムエルはエリアブを見て、「自分の前にいるこの人こそ、主が油をそそがれる人だ」と思った。七 しかし主はサムエルに言われた、「顔かたちや身だけをみてはならない。わたしはすでにその人を捨て

た。わたしが見るところは人とは異なる。人は外の顔かたちを見、主は心を見る。そこでエッサイはアビナダブを呼んでサムエルの前を通らせた。サムエルは言った、「主が選ばれたのはこの人でもない」。エッサイはシャナマを通らせたが、サムエルは言った、「主が選ばれたのはこの人でもない」。エッサイは七人の子にサムエルの前を通らせたが、サムエルはエッサイに言った、「主が選ばれたのはこの人たちではない」。サムエルはエッサイに言った、「あなたのむすこたちは皆ここにいますか」。彼は言った、「まだ末の子が残っていますが羊を飼っています」。サムエルはエッサイに言った、「人をやって彼を連れてきなさい。彼がここに来るまで、われわれは食卓につきません」。そこで人をやって彼をつれてきた。彼は血色のよい、目のきれいな、姿の美しい人であった。主は言われた、「立ってこれに油をそそげ。これがその人である」。サムエルは油の角をとって、その兄弟たちの中で、彼に油をそそいだ。この日からのち、主の霊は、はげしくダビデの上に臨んだ。そしてサムエルは立ってラマへ行った。

四 さて主の霊はサウルを離れ、主から来る悪霊が彼を悩ました。五 サウルの家来たちは彼に言った、「ごらんなさい。神から来る悪霊があなたを悩ましているのです。六 どうぞ、われわれの主君が、あなたの前に仕えている家来たちに命じて、じょうずに琴をひく者ひとりを捜さ

せてください。神から来る悪霊があなたに臨む時、彼が手で琴をひくならば、あなたは良くなれるでしょう。七 そこでサウルは家来たちに言った、「じょうずに琴をひく者を捜して、わたしのもとに連れてきなさい」。八 その時、ひとりの若者がこたえた、「わたしはベツレヘムびとエッサイの子を見ましたが、琴がじょうずで、勇気もあり、いくさびとで、弁舌にひいで、姿の美しい人です。また主が彼と共におられます」。九 そこでサウルはエッサイのもとに使者をつかわして言った、「羊を飼っているあなたの子ダビデをわたしのもとによこしなさい」。一〇 エッサイは、ろばにパンを負わせ、皮袋にいれたぶどう酒一袋と、やぎの子とを取って、その子ダビデの手によってサウルに送った。二 ダビデはサウルのもとにきて、彼に仕えた。サウルはひじょうにこれを愛して、その武器を執る者とした。三 またサウルは人をつかわしてエッサイに言った、「ダビデをわたしに仕えさせてください。彼はわたしの心にかないました」。四 神から出る悪霊がサウルに臨む時、ダビデは琴をとり、手でそれをひくと、サウルは気が静まり、良くなって、悪霊は彼を離れた。

第一七章 一 さてベリシテびとは、軍を集めて戦おうとし、ユダに属するソコに集まって、ソコとアゼカの間にあるエベス・ダミムに陣取った。二 サウルとイスラエルの人々は集まってエラの谷に陣取り、ベリシテびとに対して戦列をしいた。三 ベリシテびとは向こうの山

の上に立ち、イスラエルはこちらの山の上に立った。その間に谷があった。四時に、ペリシテびとの陣から、ガテのゴリアテという名の、戦いをいどむ者が出てきた。身のたけは六キュビト半。頭には青銅のかぶとを頂き、身には、うろことじのよろいを着ていた。そのよろいは青銅で重さ五千シケル。また足には青銅のすね当を着け、肩には青銅の投げやりを背負っていた。七手に持つてゐるやりの柄は、機の巻棒のようであり、やりの穂の鉄は六百シケルであった。彼の前には、盾を執る者が進んだ。ハゴリアテは立つてイスラエルの戦列に向かつて叫んだ、「なにゆえ戦列をつくつて出てきたのか。わたしはペリシテびと、おまえたちはサウルの家来ではないか。おまえたちから、ひとりを選んで、わたしのところへ下つてこさせよ。もしその人が戦つてわたしを殺すことができたなら、われわれはおまえたちの家来となる。しかしわたしが勝つてその人を殺したら、おまえたちは、われわれの家来になつて仕えなければならぬ」。またこのペリシテびとは言った、「わたしは、きょうイスラエルの戦列にいどむ。ひとりを出して、わたしと戦わせよ」。ニサウルとイスラエルのすべての人は、ペリシテびとのこの言葉を聞いて驚き、ひじょうに恐れた。

三さて、ダビデはユダのベツレヘムにいたエフラタびとエッサイという名の人の子で、この人に八人の子があつたが、サウルの世には年が進んで、すでに年老いて

いた。一三エッサイの子らのうち、上の三人はサウルに従つて戦争に出た。その戦いに出た三人の子の名は、長子をエリアブといい、次をアビナダブといい、第三をシャンマと言った。一四ダビデは末の子であつて、兄三人はサウルにしたがつた。一五ダビデはサウルの所から行つたりきたりして、ベツレヘムで父の羊を飼つていた。一六あのペリシテびとは四十日の間、朝夕出てきて、彼らの前に立った。

一七時に、エッサイはその子ダビデに言った、「兄たちのため、このいり麦一エバと、この十個のパンをとつて、急いで陣営にゐる兄の所へ持つていきなさい。一八またこの十の乾酪を取つて、千人の長にもつて行き、兄たちの安否を見とどけて、そのしるしをもらつてきなさい」。

一九さてサウルと彼らおよびイスラエルのすべての人は、エラの谷でペリシテびとと戦つていた。二〇ダビデは朝はやく起きて、羊を番人に託し、エッサイが命じたように食料品を携へて行つた。彼が陣地に着いた時、軍勢は、ときの声をあげて戦線に出ようとしていた。二一そしてイスラエルとペリシテびととは戦列を敷いて、軍と軍と向き合つた。二三ダビデは荷物をおろして、荷物を守る者にあずけ、戦列の方へ走つて、兄たちの所へ行き、彼らの安否を尋ねた。二四兄たちと語つてゐる時、ペリシテびとの戦列から、ガテのペリシテびとで、名をゴリアテという、あの戦いをいどむ者が上つてきて、前と同じ言



葉を言ったので、ダビデはそれを聞いた。

二四 イスラエルのすべての人は、その人を見て、避けて逃げ、ひじょうに恐れた。二五 イスラエルの人々はまた言った、「あなたがたは、あの上つてきた人を見たか。確かにイスラエルにいどむために上つてきたのだ。彼を殺す人は、王が大いなる富を与えて富ませ、その娘を与え、その父の家にはイスラエルのうちで税を免れさせるであろう」。二六 ダビデはかたわらに立っている人々に言った、「このペリシテびとを殺し、イスラエルの恥をすすぐ人には、どうされるのですか。この割礼なきペリシテびとは何者なので、生ける神の軍をいどむのか」。二七 民は前と同じように、「彼を殺す人にはこうされるであろう」と答えた。

二八 上の兄エリアブはダビデが人々と語るのを聞いて、ダビデに向かい怒りを発して言った、「なんのために下つてきたのか。野にゐるわずかの羊はだれに託したのか。あなたのわがままと悪い心はわかつてゐる。戦いを見るために下つてきたのだ」。二九 ダビデは言った、「わたしは今、何をしたいのですか。ただひと言いただけではありませんか」。三〇 またふり向いて、ほかの人に前のように語ったところ、民はまた同じように答えた。

三一 人々はダビデの語った言葉を聞いて、それをサウルに告げたので、サウルは彼を呼び寄せた。三二 ダビデはサウルに言った、「だれも彼のゆえに気を落してはなりません

ん。しもべが行ってあのペリシテびとと戦いましょう」。

三三 サウルはダビデに言った、「行って、あのペリシテびとと戦うことはできない。あなたは年少だが、彼は若い時から軍人だからです」。三四 しかしダビデはサウルに言った、「しもべは父の羊を飼つていたのですが、もし、あるいはくまがきて、群れの小羊を取った時、三五 わたしはそのあとを追つて、それを撃ち、小羊をその口から救いだしました。その獣がわたしにとびかかってきた時は、ひげをつかまえて、それを撃ち殺しました。三六 しもべはすでに、ししと、くまを殺しました。この割礼なきペリシテびとも、生ける神の軍をいどんだのですから、あの獣の一頭のようになるでしょう」。三七 ダビデはまた言った、「ししのつめ、くまのつめからわたしを救い出された主は、またわたしを、このペリシテびとの手から救い出されるでしょう」。サウルはダビデに言った、「行きなさい。どうぞ主があなたと共におられるように」。三八 としてサウルは自分のいくさ衣をダビデに着せ、青銅のかぶとを、その頭にかぶらせ、また、うろことじのよろいを身にまといさせた。三九 ダビデは、いくさ衣の上に、つるぎを帯びて行こうとしたが、できなかった。それに慣れていなかったからである。そこでダビデはサウルに言った、「わたしはこれらのものを着けていくことはできません。慣れていないからです」。四〇 ダビデはそれらを脱ぎすて、手につえをとり、谷間からなめらかな石五個を選

びとって自分の持っている羊飼の袋に入れ、手に石投げを執って、あのペリシテびとに近づいた。

四二 そのペリシテびとは進んできてダビデに近づいた。そのたてを執る者が彼の前にいた。四三 ペリシテびとは見まわしてダビデを見、これを侮った。まだ若くて血色がよく、姿が美しかったからである。四四 ペリシテびとはダビデに言った、「つえを持って、向かってくるが、わたしは犬なのか」。ペリシテびとは、また神々の名によってダビデをのろった。四五 ペリシテびとはダビデに言った、「さあ、向かってこい。おまえの肉を、空の鳥、野の獣のえじきにしてくれよう」。四六 ダビデはペリシテびとに言った、「おまえはつるぎと、やりと、投げやりを持って、わたしに向かってくるが、わたしは万軍の主の名、すなわち、おまえがいとんだ、イスラエルの軍の神の名によつて、おまえに立ち向かう。四七 きよう、主は、おまえをわたしの手にわたされるであろう。わたしは、おまえを撃つて、首をはね、ペリシテびとの軍勢の死かばねを、きよう、空の鳥、地の野獣のえじきにし、イスラエルに、神がおられることを全地に知らせよう。四八 またこの全会衆も、主は救を施すのに、つるぎとやりを用いられないことを知るであろう。この戦いは主の戦いであつて、主がわれわれの手におまえたちを渡されるからである」。

四九 そのペリシテびとが立ちあがり、近づいてきてダビデに立ち向かったので、ダビデは急ぎ戦線に走り出て、

ペリシテびとに立ち向かった。四九 ダビデは手を袋に入れて、その中から一つの石を取り、石投げで投げて、ペリシテびとの額を撃つたので、石はその額に突き入り、うつむきに地に倒れた。

五〇 こうしてダビデは石投げと石をもってペリシテびとに勝ち、ペリシテびとを撃つて、これを殺した。ダビデの手につるぎがなかったので、五一 ダビデは走りよつてペリシテびとの上に乗り、そのつるぎを取つて、さやから抜きはなし、それをもって彼を殺し、その首をはねた。五二 ペリシテの人々は、その勇士が死んだのを見て逃げた。五三 イスラエルとユダの人々は立ちあがり、ときをあげて、ペリシテびとを追撃し、ガテおよびエクロンの門にまで及んだ。そのためペリシテびとの負傷者は、シャライムからガテおよびエクロンに行く道の上に倒れた。五四 イスラエルの人々はペリシテびとの追撃を終えて帰り、その陣営を略奪した。五五 ダビデは、あのペリシテびとの首を取つてエルサレムへ持つて行ったが、その武器は自分の天幕に置いた。

五五 サウルはダビデがああペリシテびとに向かつて出ていくのを見て、軍の長アブネルに言った、「アブネルよ、この若者はだれの子か」。アブネルは言った、「王よ、あなたのいのちにかけて誓います。わたしは知らないのです」。五七 王は言った、「この若者がだれの子か、尋ねてみよ」。五七 ダビデが、あのペリシテびとを殺して帰つてき

た時、アブネルは、ペリシテびとの首を手にとって、彼を、サウルの前に連れて行った。五八サウルは彼に言った、「若者よ、あなたはだれの子か」。ダビデは答えた、「あなたのしもべ、ベツレヘムびとエッサイの子です」。

第一章 一ダビデがサウルに語り終えた時、ヨナタンの心はダビデの心に結びつき、ヨナタンは自分の命のようにダビデを愛した。二この日、サウルはダビデを召しかかえて、父の家に帰らせなかった。三ヨナタンとダビデとは契約を結んだ。ヨナタンが自分の命のようにダビデを愛したからである。四ヨナタンは自分が着ていた上着を脱いでダビデに与えた。また、そのいくさ衣、および弓も帯も、そのようにした。五ダビデはどこでもサウルがつかわす所に出て行って、てがらを立てたので、サウルは彼を兵の隊長とした。それはすべての民の心にかない、またサウルの家来たちの心にもかない。

六人々が引き揚げてきた時、すなわちダビデが、かのペリシテびとを殺して帰った時、女たちはイスラエルの町々から出てきて、手鼓と祝い歌と三糸の琴をもつて、歌いつ舞いつ、サウル王を迎えた。七女たちは踊りながら互に歌いかわした。

「サウルは千を撃ち殺し、

ダビデは万を撃ち殺した」。

八サウルは、ひじょうに怒り、この言葉に気を悪くして

言った、「ダビデには万と言ひ、わたしには千と言ひ。この上、彼に与えるものは、国のほかないではないか」。九サウルは、この日からのちダビデをうかがった。

二〇次の日、神から来る悪霊がサウルにはげしく臨んで、サウルが家の中で狂いわめいたので、ダビデは、いつものように、手で琴をひいた。その時、サウルの手にやりがあつたので、二サウルは「ダビデを壁に刺し通そう」と思つて、そのやりをふり上げた。しかしダビデは二度身をかわしてサウルを避けた。

三主がサウルを離れて、ダビデと共におられたので、サウルはダビデを恐れた。三それゆゑサウルは、ダビデを遠ざけて、千人の長としたので、ダビデは民の先に立つて出入りした。四またダビデは、すべてそのすること、てがらを立てた。主が共におられたからである。五サウルはダビデが大きなてがらを立てるのを見て彼を恐れたが、六イスラエルとユダのすべての人はダビデを愛した。彼が民の先に立つて出入りしたからである。

七その時サウルはダビデに言った、「わたしの長女メラブを、あなたに妻として与えよう。ただ、あなたはわたしのために勇ましくし、主の戦いを戦いなさい」。サウルは「自分の手で彼を殺さないで、ペリシテびとの手で殺そう」と思つたからである。八ダビデはサウルに言った、「わたしは何者なんでしょう。わたしの親族、わたしの父の一族はイスラエルのうちで何者なんでしょう」。



そのわたしが、どうして王のむこになることができませんよう。一九しかしサウルの娘メラブは、ダビデにとつぐべき時になって、メホラびとアデリエルに妻として与えられた。

二〇サウルの娘ミカルはダビデを愛した。人々がそれをサウルに告げたとき、サウルはその事を喜んだ。三サウルは「ミカルを彼に与えて、彼を欺く手だてとし、ペリシテびとの手で彼を殺そう」と思ったので、サウルはふたたびダビデに言った、「あなたを、きょう、わたしのむこにします」。三そしてサウルは家来たちに命じた、「ひそかにダビデに言いなさい、『王はあなたが気に入る、王の家来たちも皆あなたを愛しています。それゆえ王のむこになりなさい』。三そこでサウルの家来たちはこの言葉をダビデの耳に語ったので、ダビデは言った、「わたしのよう貧しく、卑しい者が、王のむこになることは、あなたがたには、たやすいことと思われませんか」。二四サウルの家来たちはサウルに、「ダビデはこう言った」と告げた。二五サウルは言った、「あなたがたはダビデにこう言いなさい、『王はなにも結納を望まれない。ただペリシテびとの陽の皮一百を獲て、王のあだを討つことを望まれる』。これはサウルが、ダビデをペリシテびとの手によつて倒そうと思つたからである。二六サウルの家来たちが、この言葉をダビデに告げた時、ダビデは王のむこになることを良しとした。そして定めた日がまだこないう

ちに、二七ダビデは従者をつれて、立つて行き、ペリシテびと二百人を殺して、その陽の皮を携え帰り、王のむこになるために、それをことごとく王にささげた。そこでサウルは娘ミカルを彼に妻として与えた。二八しかしサウルは見えて、主がダビデと共におられること、またイスラエルのすべての人がダビデを愛するのを知った時、二九サウルは、ますますダビデを恐れた。こうしてサウルは絶えずダビデに敵した。

三〇さてペリシテびとの君たちが攻めてきたが、ダビデは、彼らが攻めてくるごとに、サウルのどの家来よりも多くのてがらを立てたので、その名はひじょうに尊敬された。

## 第十九章

一サウルはその子ヨナタンおよびすべての家来たちにダビデを殺すようにと言った。しかしサウルの子ヨナタンは深くダビデを愛していた。二ヨナタンはダビデに言った、「父サウルはあなたを殺そうとしています。それゆえあすの朝、氣をつけて、わからない場所に身を隠していてください。三わたしは出て行って、あなたがいる野原で父のかたわらに立ち、父にあなたのことを話しましょう。そして、何かわたしにわかれば、あなたに告げましょう。四ヨナタンは父サウルにダビデのことをほめて言った、『王よ、どうか家来ダビデに対して罪を犯さないでください。彼は、あなたに罪を犯さず、また彼のしたことは、あなたのためになることでした。』

五彼は命をかけて、あのペリシテびとを殺し、主はイスラエルの人々に大いなる勝利を与えられたのです。あなたはそれを見て喜ばれました。それであるのに、どうしてゆえなくダビデを殺し、罪なき者の血を流して罪を犯そうとされるのですか。六サウルはヨナタンの言葉を聞き入れた。そしてサウルは誓った、「主は生きておられる。わたしは決して彼を殺さない」。七ヨナタンはダビデを呼んでこれらのことをみなダビデに告げた。そしてヨナタンがダビデをサウルのもとに連れてきたので、ダビデは、もとのようにサウルの前にいた。

八ところがまた戦争がおこって、ダビデは出てペリシテびとと戦い、大いに彼らを殺したので、彼らはその前から逃げ去った。九さてサウルが家にいて手にやりを持ってすわっていた時、主から来る悪霊がサウルに臨んだので、ダビデは琴をひいていたが、一〇サウルはそのやりをもってダビデを壁に刺し通そうとした。しかし彼はサウルの前に身をかわしたので、やはり壁につきささった。そしてダビデは逃げ去った。

二その夜、サウルはダビデの家に使者たちをつかわし、見張りをさせ、朝になって彼を殺させようとした。しかしダビデの妻ミカルはダビデに言った、「もし今夜のうちに、あなたが自分の命を救わないならば、あすは殺されるでしょう」。三そしてミカルがダビデを窓からつりおろしたので、彼は逃げ去った。四ミカルは一つの像を

とって、寢床の上に横たえ、その頭にやぎの毛の網をかけ、着物をもってそれをおおった。一四サウルはダビデを捕えるため使者たちをつかわしたが、彼女は言った、「あの人は病気で死す」。一五そこでサウルは、ダビデを見せようと使者たちをつかわして言った、「彼を寢床のまま、わたしの所に連れてきなさい。わたしが彼を殺そう」。一六使者たちがはいつて見ると、寢床には像が横たえてあって、その頭には、やぎの毛の網がかけてあった。一七サウルはミカルに言った、「あなたはどのようにして、このようにわたしを欺いて、わたしの敵を逃がしたのか」。ミカルはサウルに答えた、「あの人はわたしに『逃がしてくれ。さもないと、おまえを殺す』と言いました」。

一八ダビデは逃げ去り、ラマにいるサムエルのもとへ行って、サウルが自分にしたすべてのことを彼に告げた。そしてダビデとサムエルは行ってナヨテに住んだ。一九ある人がサウルに「ダビデはラマのナヨテにいます」と告げたので、二〇サウルは、ダビデを捕えるために、使者たちをつかわした。彼らは預言者の一群が預言している、サムエルが、そのうちの、かしらとなって立っているのを見たが、その時、神の霊はサウルの使者たちにも臨んで、彼らもまた預言した。二一サウルは、このことを聞いて、他の使者たちをつかわしたが、彼らもまた預言した。サウルは三たび使者たちをつかわしたが、彼らもまた預言した。二二そこでサウルはみずからラマに行き、

セクの大井戸に着いた時、問うて言った、「サムエルとダビデは、どこにおるか」。ひとりの人が答えた、「彼らはラマのナヨテにいます」。そこでサウルはそこからラマのナヨテに行ったが、神の霊はまた彼にも臨んで、彼はラマのナヨテに着くまで歩きながら預言した。二四そして彼もまた着物を脱いで、同じようにサムエルの前で預言し、一日一夜、裸で倒れ伏していた。人々が「サウルもまた預言者たちのうちにいるのか」というのはこのためである。

## 第二〇章

「ダビデはラマのナヨテから逃げてきて、ヨナタンに言った、「わたしが何をし、どのような悪いことがあり、あなたの父の前にどんな罪を犯したので、わたしを殺そうとされるのでしょうか」。ヨナタンは彼に言った、「決して殺されることはありません。父は事の大小を問わず、わたしに告げないですることはありません。どうして父がわたしにその事を隠しでしょう。そのようなことはありません。むしろダビデは答えた、「あなたの父は、わたしがあなたの好意をえていることをよく知っておられます。それで『ヨナタンが悲しむことのないように、これを知らせないでおこう』と思っておられるのです。しかし、主は生きておられ、あなたの魂は生きています。わたしと死との間は、ただ一歩です」。ヨナタンはダビデに言った、「あなたが言われることはなんでもします」。ダビデはヨナタンに言った、「あすは、

ついたちですから、わたしは王と一緒に食事をしなければなりません。しかしわたしを行かせて三日目の夕方まで、野原に隠れることを許してください。六もしあなたの父がわたしのことを尋ねられるならば、その時、言うてください、『ダビデはふるさとの町ベツレヘムへ急いで行くことを許してくださいと、しきりにわたしに求めました。そこで全家の年祭があるからです』。七もし彼が「よし」と言われるなら、しもべは安全ですが、怒られるなら、わたしに害を加える決心でおられるのを知ってください。八あなたは、主の前で、しもべと契約を結んでくださいました。それでどうぞしもべにいくしみを施してください。しかし、もしわたしに悪いことがあるならば、あなた自らわたしを殺してください。どうしてあなたの父のもとへわたしを引いていかなければならぬいでしょう。九ヨナタンは言った、「そのようなことは決してありません。父があなたに害を加える決心をしていることがわたしにわかっていいるならば、わたしはそれをあなたに告げないでおきましょうか。一〇ダビデはヨナタンに言った、「あなたの父が荒々しくあなたに答えられる時、だれがわたしに告げるでしょうか」。二ヨナタンはダビデに言った、「さあ、野原へ出ていこう」。こうしてふたりは野原へ出て行った。

三そしてヨナタンはダビデに言った、「イスラエルの神、主が、証人です。明日か明後日の今ごろ、わたしが



父の心を探つて、父がダビデに対して良いのを見ながら、人をつかわしてあなたに知らせないようなことをするでしょうか。三しかし、もし父があなたに害を加えようと思つてゐるのに、それをあなたに知らせず、あなたを逃がして、安全に去らせないならば、主よ、どうぞ幾重にも、このヨナタンを罰してください。どうぞ主が父と共におられたように、あなたと共におられますように。二四もしわたしがなお生きながらゐるならば、主のいつくしみをわたしに施し、死を免れさせてください。二五またわたしの家をも、長くあなたのいつくしみにあずからせてください。主がダビデの敵をことごとく地のおもてから断ち滅ぼされる時、一六ヨナタンの名をダビデの家から絶やさないでください。どうぞ主がダビデの敵に、あだを返されるように。一七そしてヨナタンは重ねてダビデに誓わせた。彼を愛したからである。ヨナタンは自分の命のように彼を愛していた。

一八ヨナタンはダビデに言った、「あすはついたちです。あなたの席があとにあるので、どうしたのかと尋ねられるでしょう。一九三日目には、きびしく尋ねられるでしょうから、先にあなたが隠れた場所へ行つて、向こうの石塚のかたわらにいてください。二〇わたしは的を射るようにして、矢を三本、そのそばに放ちます。二一そして、『行つて矢を捜してきなさい』と言つて子供をつかわしましょう。わたしが子供に、『矢は手前にある。それを

取つてきなさい』と言うならば、その時あなたはきてください。主が生きておられるように、あなたは安全で、何も危険がないからです。二三しかしわたしがその子供に、『矢は向こうにある』と言うならば、その時、あなたは去つて行きなさい。主があなたを去らせられるのです。二四あなたとわたしとで話しあつた事については、主が常にあなたとわたしとの間におられます」。

二五そこでダビデは野原に身を隠した。さて、ついたちになつたので、王は食事をするため席に着いた。二六王はいつものように壁寄りに席に着き、ヨナタンはその向かい側の席に着き、アブネルはサウルの横の席に着いたが、ダビデの場所にはだれもいなかった。

二七ところがその日サウルは何も言わなかった、「彼に何か起つて汚れたのだらう。きつと汚れたのにちがいない」と思つたからである。二八しかし、ふつか目すなわち、ついたちの明くる日も、ダビデの場所にはいたので、サウルは、その子ヨナタンに言った、「どうしてエッサイの子は、きのうもきょうも食事にこないのか」。二九ヨナタンはサウルに答えた、「ダビデは、ベツレヘムへ行くことを許してくださいと、しきりにわたしに求めました。二〇彼は言いました、『わたしに行かせてください。われわれの一族が町で祭をするので、兄がわたしに来るようにと命じました。それでも、あなたの前に恵みを得ますならば、どうぞ、わたしに行くことを許し、兄弟たちに

あわせてください。それで彼は王の食卓にこなかったのです。」

三〇その時サウルはヨナタンにむかって怒りを発し、彼に言った、「あなたは心の曲った、そむく女の産んだ子だ。あなたがエッサイの子を選んで、自分の身はずかしめ、また母の身はずかしめていることをわたしは知らないと思うのか。三エッサイの子がこの世に生きながらえている間は、あなたも、あなたの王国も堅く立っていくことはできない。それゆえ今、人をつかわして、彼をわたしのもとに連れてこさせなさい。彼は必ず死ななければならぬ」。三二ヨナタンは父サウルに答えた、「どうして彼は殺されなければならぬのですか。彼は何をしたのですか」。三三ところがサウルはヨナタンを撃とうとして、やりを彼に向かって振り上げたので、ヨナタンは父がダビデを殺そうと、心に決めているのを知った。三四ヨナタンは激しく怒って席を立ち、その月のふつかには食事をしなかった。父がダビデをはずかしめたので、ダビデのために憂えたからである。

三五あくる朝、ヨナタンは、ひとりの小さい子供を連れて、ダビデと打ち合わせたように野原に出て行った。三六そしてその子供に言った、「走って行って、わたしの射る矢を捜しなさい」。子供が走って行く間に、ヨナタンは矢を彼の前の方に放った。三七そして子供が、ヨナタンの放った矢のところへ行つた時、ヨナタンは子供のうし

ろから呼ばわって、「矢は向こうにあるではないか」と言った。三八ヨナタンはまた、その子供のうしろから呼ばわって言った、「早くせよ。急げ。とどまるな」。その子供は矢を拾い集めて主人ヨナタンのもとにきた。三九しかし子供は何も知らず、ヨナタンとダビデだけがそのことを知っていた。四〇ヨナタンは自分の武器をその子供に渡して言った、「あなたはこれを町へ運んで行きなさい」。四一子供が行つてしまふとダビデは石塚のかたわらをはなれて立ちいで、地にひれ伏して三度敬礼した。そして、ふたりは互に口づけし、互に泣いた。やがてダビデは心が落ち着いた。四二その時ヨナタンはダビデに言った、「無事に行きなさい。われわれふたりは、『主が常にわたしとあなたの間におられ、また、わたしの子孫とあなたの子孫の間におられる』と言って、主の名をさして誓ったのです」。こうしてダビデは立ち去り、ヨナタンは町にはいった。

第二一章　ダビデはノブに行き、祭司アヒメレクのところへ行つた。アヒメレクはおののきながらダビデを迎えて言った、「どうしてあなたはひとりですか。だれも供がないのですか」。二ダビデは祭司アヒメレクに言った、「王がわたしに一つの事を命じて、『わたしがおまえをつかわしてさせる事、またわたしが命じたことについて、何を人に知らせてはならない』と言われました。そこでわたしは、ある場所に若者たちを待たせてあ

ります。三とところで今あなたの手もとにパン五個でもあれば、それをわたしにください。なければなんでも、あるものをください。四祭司はダビデに答えて言った、「常のパンはわたしの手もとにありません。ただその若者たちが女を慎んでさいいたのでしたら、聖別したパンがあります。五ダビデは祭司に答えた、「わたしが戦いに出るいつもの時のように、われわれはたしかに女たちを近づけていません。若者たちの器は、常の旅であつたとしても、清いのです。まして、きよう、彼らの器は清くないでしようか。六そこで祭司は彼に聖別したパンを与えた。その所に、供えのパンのほかにパンがなく、このパンは、これを取り下げる日に、あたたかいパンと置きかえるため、主の前から取り下げたものである。

七その日、その所に、サウルのしもべのひとりが、主の前に留め置かれていた。その名はドエグといい、エドムびとであつて、サウルの牧者の長であつた。

八ダビデはまたアヒメレクに言った、「ここに、あなたの手もとに、やりかつるぎがありませんか。王の事が急を要したので、わたしはつるぎも武器も持ってこなかったのです。九祭司は言った、「あなたがエラの谷で殺したペリシテびとゴリアテのつるぎが、布に包んでエポデのうしろにあります。もしあなたがこれを取ろうとおもわれるなら、お取りください。ここにはそのほかにはありません。ダビデは言った、「それにまさるものはありま

せん。それをわたしにください。一〇ダビデはその日サウルを恐れて、立つてガテの王アキシのところへ逃げて行つた。二アキシの家来たちはアキシに言った、「これはあの国の王ダビデではありませんか。人々が踊りながら、互に歌いかわして、

『サウルは千を撃ち殺し、

ダビデは万を撃ち殺した』

と言つたのは、この人のことではありませんか。三ダビデは、これらの言葉を心におき、ガテの王アキシを、ひじょうに恐れたので、三人々の前で、わざと挙動を変え、捕えられて氣違ひのふりをし、門のとびらを打ちたたき、よだれを流して、ひげに伝わらせた。四アキシは家来たちに言った、「あなたがたの見るように、この人は氣違ひだ。どうして彼をわたしの所へ連れてきたのか。五わたしに氣違ひが必要なのか。この者を連れてきて、わたしの前で狂わせようというのか。この者をわたしの家へ入れようとするのか。」

第二二章 一こうしてダビデはその所を去り、アドラムのほら穴へのがれた。彼の兄弟たちと父の家の子は皆、これを聞き、その所に下つて彼のもとにきた。二また、しえたげられてゐる人々、負債のある人々、心に不満のある人々も皆、彼のもとに集まつてきて、彼はその長となつた。おおよそ四百人の人々が彼と共にあつた。

三ダビデはそこからモアブのミツバへ行き、モアブの



王に言った、「神がわたしのためにどんなことをされるかわかるまで、どうぞわたしの父母をあなたの所におらせてください」。四そして彼はモアブの王に彼らを託したので、彼らはダビデが要害における間、王の所におった。五さて、預言者ガドはダビデに言った、「要害にとどまっていないうで、去ってユダの地へ行きなさい」。そこでダビデは去って、ハレテの森へ行った。

六サウルは、ダビデおよび彼と共にいる人々が見つかったということを聞いた。サウルはギベアで、やりを手にもって、丘のぎよりゆうの木の下にすわっており、家来たちはみなそのまわりに立っていた。七サウルはまわりに立っている家来たちに言った、「あなたがたベニヤミンびとは聞きなさい。エッサイの子もまた、あなたがたのおのにおに畑やぶどう畑を与え、おのをおを千人の長、百人の長にするであろうか。八あなたがたは皆共にはかってわたしに敵した。わたしの子がエッサイの子と契約を結んでも、それをわたしに告げるものではなく、またあなたがたのうち、ひとりもわたしのために憂えず、きょうのように、わたしの子がわたしのしもべをそそのかしてわたしに逆らわせ、道で彼がわたしを待ち伏せするようになって、わたしに告げる者はない」。九その時エドムびとドエグは、サウルの家来たちのそばに立っていたが、答えて言った、「わたしはエッサイの子がノブにいるアヒトブの子アヒメレクの所にきたのを見ました。

一〇アヒメレクは彼のために主に問い、また彼に食物を与え、ベリシテびとゴリアテのつるぎを与えました」。

二そこで王は人をつかわして、アヒトブの子祭司アヒメレクとその父の家のすべての者、すなわちノブの祭司たちを召したので、みな王の所に来た。三サウルは言った、「アヒトブの子よ、聞きなさい」。彼は答えた、「わが主よ、わたしはここにおります」。四サウルは彼に言った、「どうしてあなたはエッサイの子と共にはかってわたしに敵し、彼にパンとつるぎを与え、彼のために神に問い、きょうのように彼をわたしに逆らって立たせ、道で待ち伏せさせるのか」。五アヒメレクは王に答えて言った、「あなたの家来のうち、ダビデのように忠義な者がほかにありますか。彼は王の娘婿であり、近衛兵の長であって、あなたの家で尊ばれる人ではありませんか。六彼のために神に問うたのは、きょう初めてでしょうか。いいえ、決してそうではありません。王よ、どうぞしもべと父の全家に罪を負わせないでください。しもべは、これについては、事の大小を問わず、何を知らなかったのです」。七王は言った、「アヒメレクよ、あなたは必ず殺されなければならない。あなたの父の全家も同じである」。八そして王はまわりに立っている近衛兵に言った、「身をひるがえして、主の祭司たちを殺しなさい。彼らもダビデと協力していて、ダビデの逃げたのを知りながら、それをわたしに告げなかったからです」。

ところが王の家来たちは主の祭司たちを殺すために手を下そうとはしなかった。「そこで王はドエグに言った、「あなたが身をひるがえして、祭司たちを殺しなさい」。

エドムびとドエグは身をひるがえして祭司たちを撃ち、その日亜麻布のエポデを身につけている者八十五人を殺した。一九彼はまた、つるぎをもつて祭司の町ノブを撃ち、つるぎをもつて男、女、幼な子、乳飲み子、牛、ろば、羊を殺した。

二〇しかしアヒトブの子アヒメレクの子たちのひとり、名をアビヤタルという人は、のがれてダビデの所に走った。二一そしてアビヤタルは、サウルが主の祭司たちを殺したことをダビデに告げたので、二二ダビデはアビヤタルに言った、「あの日、エドムびとドエグがあそこにいるので、わたしは彼がきつとサウルに告げるであろうと思つた。わたしがあなたの父の家の人々の命を失わせるもとなつたのです。二三あなたはわたしの所にとどまつてください。恐れることはありません。あなたの命を求める者は、わたしの命をも求めているのです。わたしの所におられるならば、あなたは安全でしょう」。

第二十三章 「さて人々はダビデに告げて言つた、「ペリシテびとがケイラを攻めて、打ち場の穀物をかすめています」。二そこでダビデは主に問うて言つた、「わたしが行って、このペリシテびとを撃ちましようか」。主はダビデに言われた、「行ってペリシテびとを撃ち、ケイ

ラを救いなさい」。三しかしダビデの従者たちは彼に言つた、「われわれは、ユダのここにおつてさえ、恐れているのに、ましてケイラへ行って、ペリシテびとの軍に当ることができましようか」。四ダビデが重ねて主に問うたところ、主は彼に答えて言われた、「立つて、ケイラへ下りなさい。わたしはペリシテびとをあなたの手に渡します」。五ダビデとその従者たちはケイラへ行って、ペリシテびとと戦ひ、彼らの家畜を奪ひとり、彼らを多く撃ち殺した。こうしてダビデはケイラの住民を救つた。

六アヒメレクの子アビヤタルは、ケイラにいるダビデのもとにのがれてきた時、手にエポデをもつて下つてきた。七さてダビデのケイラにきたことがサウルに聞えたので、サウルは言つた、「神はわたしの手に彼をわたされた。彼は門と貫の木のある町にはいつて、自分で身を閉じこめたからである」。八そこでサウルはすべての民を戦いに呼び集めて、ケイラに下り、ダビデとその従者を攻め囲もうとした。九ダビデはサウルが自分に害を加えようとしているのを知つて、祭司アビヤタルに言つた、「エポデを持ってきました。一〇そしてダビデは言つた、「イスラエルの神、主よ、しもべはサウルがケイラにきて、わたしのために、この町を滅ぼそうとしていることを確かに聞きました。二ケイラの人々はわたしを彼の手に渡すでしようか。しもべの聞いたように、サウルは下つてくるでしようか。イスラエルの神、主よ、どうぞ、し

もべに告げてください」。主は言われた、「彼は下つて来る」。二「ダビデは言った、「ケイラの人々はわたしと従者たちをサウルの手にわたすでしょうか」。主は言われた、「彼らはあなたがたを渡すであろう」。三「そこでダビデとその六百人ほどの従者たちは立って、ケイラを去り、いずこともなくさまよった。ダビデのケイラから逃げ去ったことがサウルに聞えたので、サウルは戦いに出ることをやめた。四「ダビデは荒野にある要害におり、またジフの荒野の山地におった。サウルは日々に彼を尋ね求めたが、神は彼をその手に渡されなかった。

五「さてダビデはサウルが自分の命を求めて出てきたので恐れた。その時ダビデはジフの荒野のホレシにいたが、六「サウルの子ヨナタンは立って、ホレシにいるダビデのもとに行き、神によって彼を力づけた。七「そしてヨナタンは彼に言った、「恐れるにはおよびません。父サウルの手はあなたに届かないでしょう。あなたはイスラエルの王となり、わたしはあなたの次となるでしょう。このことは父サウルも知っています」。八「こうして彼らふたりは主の前で契約を結び、ダビデはホレシにとどまり、ヨナタンは家に帰った。

九「その時ジフびとはギベアにいるサウルのもとに上って行き、そして言った、「ダビデは、荒野の南にあるハキラの丘の上のホレシの要害に隠れて、われわれと共にいるではありませんか。一〇「それゆえ王よ、あなたが下って

行こうという望みのとおり、いま下つてきてください。われわれは彼を王の手に渡します」。三「サウルは言った、「あなたがたはわたしに同情を寄せてくれたのです。どうぞ主があなたがたを祝福されるように。四「あなたがたは行って、なお確かめてください。彼のよく行く所とだれがそこで彼を見たかを見きわめてください。人の語るところによると、彼はひじょうに悪賢いそうだ。五「それで、あなたがたは彼が隠れる隠れ場所をみな見きわめ、確かな知らせをもってわたしの所に帰ってきなさい。その時わたしはあなたがたと共にいきます。もし彼がこの地にいるならば、わたしはユダの氏族をあまねく尋ねて彼を捜しだします」。六「彼らは立って、サウルに先立つてジフへ行った。

七「さてダビデとその従者たちは荒野の南のアラバにあるマオンの荒野にいた。八「そしてサウルとその従者たちはきて彼を捜した。人々がこれをダビデに告げたので、ダビデはマオンの荒野にある岩の所へ下って行った。サウルはこれを聞いて、マオンの荒野にきてダビデを追った。九「サウルは山のこちら側を行き、ダビデとその従者たちとは山のむこう側を行った。そしてダビデは急いでサウルからのがれようとした。サウルとその従者たちが、ダビデとその従者たちを囲んで捕えようとしたからである。一〇「その時、サウルの所に、ひとりの使者がきて言った、「ベリシテびとが国を侵しています。急いできてくだ



さい」。二八そこでサウルはダビデを追うことをやめて帰り、行ってペリシテびとに当たった。それで人々は、その所を「のがれの岩」と名づけた。二九ダビデはそこから上ってエンゲデの要害にいた。

第二四章 「サウルがペリシテびとを追うことを

やめて帰ってきたとき、人々は彼に告げて言った、「ダビデはエンゲデの野にいます」。三〇そこでサウルは、全イスラエルから選んだ三千の人を率い、ダビデとその従者たちとを捜すため、「やぎの岩」の前へ出かけた。三途中、羊の通りの所にきたが、そこに、ほら穴があり、サウルは足をおおうために、その中にはいった。その時、ダビデとその従者たちは、ほら穴の奥にいた。四ダビデの従者たちは彼に言った、「主があなたに告げて、『わたしはあなたの敵をあなたの手に渡す。あなたは自分の良いと思うことを彼にすることができると言われた日』がきたのです」。そこでダビデは立って、ひそかに、サウルの上着のすそを切った。五しかし後になって、ダビデはサウルの上着のすそを切ったことに、心の責めを感じた。六ダビデは従者たちに言った、「主が油を注がれたわが君に、わたしがこの事をするのを主は禁じられる。彼は主が油を注がれた者であるから、彼に敵して、わたしの手をのべるのは良くない」。七ダビデはこれらの言葉ををもって従者たちを差し止め、サウルを撃つことを許さなかった。サウルは立って、ほら穴を去り、道を進んだ。

八ダビデもまた、そのあとから立ち、ほら穴を出て、サウルのうしろから呼ばわって、「わが君、王よ」と言った。サウルがうしろをふり向いた時、ダビデは地にひれ伏して拝した。九そしてダビデはサウルに言った、「どうして、あなたは『ダビデがあなたを害しようとしている』という人々の言葉を聞かれるのですか。一〇あなたは、この日、自分の目で、主があなたをきょう、ほら穴の中でわたしの手に渡されたのをごらんになりました。人々はわたしにあなたを殺すことを勧めたのですが、わたしは殺しませんでした。『わが君は主が油を注がれた方であるから、これに敵して手をのべることはしない』とわたしは言いました。二わが父よ、ごらんなさい。あなたの上着のすそは、わたしの手にあります。わたしがあなたの上着のすそを切り、しかも、あなたを殺さなかったことによつて、あなたは、わたしの手に悪も、とがもないことを見て知られるでしょう。あなたはわたしの命を取ろうと、ねらっておられますが、わたしはあなたに対して罪をおかしたことはないのです。三どうぞ主がわたしとあなたの間をさばられますように。また主がわたしのために、あなたに報いられますように。しかし、わたしはあなたに手をくだすことをしないでしよう。四昔から、ことわざに言っているように、『悪は悪人から出る』。しかし、わたしはあなたに手をくだすことをしないでしよう。五イスラエルの王は、だれを追って出てこられたの

ですか。あなたは、だれを追っておられるのですか。死んだ犬を追っておられるのです。一匹の蚤を追っておられるのです。二五どうぞ主がさばきびととなって、わたしとあなたの間をさばき、かつ見て、わたしの訴えを聞き、わたしをあなたの手から救い出してくださいように」。

二六ダビデがこれらの言葉をサウルに語り終ったとき、サウルは言った、「わが子ダビデよ、これは、あなたの声であるか」。そしてサウルは声をあげて泣いた。二七サウルはまたダビデに言った、「あなたはわたしよりも正しい。わたしがあなたに悪を報いたのに、あなたはわたしに善を報いる。二八きょう、あなたはいかに良くわたしをあつかったかを明らかにしました。すなわち主がわたしをあなたの手にわたされたのに、あなたはわたしを殺さなかつたのです。二九人は敵に会ったとき、敵を無事に去らせるでしょうか。あなたが、きょう、わたしにした事のゆえに、どうぞ主があなたに良い報いを与えられるように。三〇今わたしは、あなたがかならず王となることを知りました。またイスラエルの王国が、あなたの手によって堅く立つことを知りました。三一それゆえ、あなたはわたしのあとに、わたしの子孫を断たず、またわたしの父の家から、わたしの名を滅ぼし去らないと、いま主をさして、わたしに誓ってください」。三二そこでダビデはサウルに、そのように誓った。そしてサウルは家に帰り、ダビデとその従者たちは要害にのぼって行った。

## 第二章

一さてサムエルが死んだので、イスラエルの人々はみな集まって、彼のためにひじょうに悲しみ、ラマにあるその家に彼を葬った。

二そしてダビデは立つてベランの荒野に下って行った。ニマオンに、ひとりの人があつて、カルメルにその所有があり、ひじょうに裕福で、羊三千頭、やぎ一千頭を持っていた。彼はカルメルで羊の毛を切っていた。三その人の名はナバルといい、妻の名はア비가イルといった。四ア비가イルは賢くて美しかったが、その夫は剛情で、粗暴であつた。彼はカレブびとであつた。五ダビデは荒野にいて、ナバルがその羊の毛を切っていることを聞いたので、五十人の若者をつかわし、その若者たちに言った、「カルメルに上って行ってナバルの所へ行き、わたしの名をもって彼にあいさつし、六彼にこう言いなさい、『どうぞあなたに平安があるように。あなたの家に平安があるように。またあなたのすべての持ち物に平安があるように。七わたしはあなたが羊の毛を切っておられることを聞きました。あなたの羊飼たちはわれわれと一緒にいたのですが、われわれは彼らを少しも害しませんでした。また彼らはカルメルにいて、何ひとつ失ったことはありません。八あなたの若者たちに聞いてみられるならば、わかります。それゆえ、わたしの若者たちに、あなたの好意を示してください。われわれは祝の日にきたのです。どうぞ、あなたの手もとにあるものを、贈り

物として、しもべどもとあなたの子ダビデにください。』

九ダビデの若者たちは行つて、ダビデの名をもつて、これらの言葉をナバルに語り、そして待つていた。一〇ナバルはダビデの若者たちに答えて言った、「ダビデとはだれか。エッサイの子とはだれか。このごろは、主人を捨てて逃げるしもべが多い。一〇どうしてわたしのパンと水、またわたしの羊の毛を切る人々のためにほふった肉をとつて、どこからきたのかわからない人々に与えることができようか。一二ダビデの若者たちは、そこを去り、帰つてきて、彼にこのすべての事を告げた。一三そこでダビデは従者たちに言った、「おのおの、つるぎを帯びなさい。彼らはおのおのつるぎを帯び、ダビデもまたつるぎを帯びた。そしておおよそ四百人がダビデに従つて上つていき、二百人は荷物のところにとどまつた。

一四ところで、ひとりの若者がナバルの妻アビゲイルに言った、「ダビデが荒野から使者をつかわして、主人にあいさつをしたのに、主人はその使者たちをのしらねしました。一五しかし、あの人々はわれわれに大へんよくしてくれて、われわれは少しも害を受けず、またわれわれが野にいた時、彼らと共にいた間は、何ひとつ失つたことはありませんでした。一六われわれが羊を飼つて彼らと共にいる間、彼らは夜も昼もわれわれのかきとなつてくれました。一七それで、あなたは今それを知つて、自分のすることを考えてください。主人とその一家に災が起きる

からです。しかも主人はよこしまな人で、話しかけることもできません。』

一八その時、アビゲイルは急いでパン二百、ぶどう酒の皮袋二つ、調理した羊五頭、いり麦五セア、ほしぶどう百ふさ、ほしいちじくのかたまり二百を取つて、ろばにのせ、一九若者たちに言った、「わたしのさきに進みなさい。わたしはあなたがたのうしろに、ついて行きます。しかし彼女は夫ナバルには告げなかった。二〇アビゲイルが、ろばに乗つて山陰を下つてきた時、ダビデと従者たちは彼女の方に向かつて降りてきたので、彼女はその人に出会つた。二一さて、ダビデはさきにこう言った、「わたしはこの人が荒野で持つてゐる物をみな守つて、その人に属する物を何ひとつなくならないようにしたが、それは全くむだであつた。彼はわたしのした親切に悪をもつて報いた。二二もしわたしがあすの朝まで、ナバルに属するすべての者のうち、ひとりの男でも残しておくならば、神が幾重にもダビデを罰してください。二二アビゲイルはダビデを見て、急いで、ろばを降り、ダビデの前で地にひれ伏し、二四その足もとに伏して言った、「わが君よ、このとがをわたしだけに負わせてください。しかしどうぞ、はしたために、あなたの耳に語ることを許し、はしための言葉をお聞きください。二五わが君よ、どうぞ、このよこしまな人ナバルのことを気にかけないでください。あの人はその名のとおりです。名はナバル



で、愚か者です。あなたのはしためであるわたしは、わが君なるあなたがつかかわされた若者たちを見なかったのです。二六それゆえ今、わが君よ、主は生きておられます。またあなたは生きておられます。主は、あなたがきて血を流し、また手ずから、あだを報いるのをとどめられました。どうぞ今、あなたの敵、およびわが君に害を加えようとする者は、ナバルのごとくになりますように。二七今、あなたのつかえめが、わが君に携えてきた贈り物を、わが君に従う若者たちに与えてください。二八どうぞ、はしためのとがを許してください。主は必ずわが君のために確かな家を造られるでしょう。わが君が主のいくさを戦い、またこの世に生きながらえられる間、あなたのうちに悪いことが見いだされなからずです。二九たとい人が立ってあなたを追い、あなたの命を求めても、わが君の命は、生きている者の束にたばねられて、あなたの神の主のもとに守られるでしょう。しかし主はあなたの敵の命を、石投げの中から投げるように、投げ捨てられるでしょう。三〇そして主があなたについて語られたすべての良いことをわが君に行い、あなたをイスラエルのつかさに任じられる時、三一あなたが、ゆえなく血を流し、またわが君がみずからあだを報いたと言うことで、それがあなたのつまずきとなり、またわが君の心の責めとなることのないようにしてください。主がわが君を良くせられる時、このはしためを思いだしてください。

三二ダビデはアビガイルに言った、「きょう、あなたをつかわして、わたしを迎えさせられたイスラエルの神、主はほむべきかな。三三あなたの知恵はほむべきかな。またあなたはほむべきかな。あなたは、きょう、わたしがきて血を流し、手ずからあだを報いるのをとどめられたのです。三四わたしがあなたを害することをとどめられたイスラエルの神、主はまことに生きておられる。もしあなたが急いでわたしに会いにこなかったならば、あすの朝までには、ナバルのところに、ひとりの男も残らなかったでしょう。三五ダビデはアビガイルが携えてきた物をその手から受けて、彼女に言った、「あなたは無事にのぼって、家に帰りなさい。わたしはあなたの声を聞きいれ、あなたの願いを許します」。

三六こうしてアビガイルはナバルのもとにきたが、見よ、彼はその家で、王の酒宴のような酒宴を開いていた。ナバルは心に楽しみ、ひじょうに酔っていたので、アビガイルは明くる朝まで事の大小を問わず何をも彼に告げなかった。三七朝になってナバルの酔いがさめたとき、その妻が彼にこれらの事を告げると、彼の心はそのうちに死んで、彼は石のようになつた。三八十日ばかりして主がナバルを撃たれたので彼は死んだ。

三九ダビデはナバルが死んだと聞いて言った、「主はほむべきかな。主はわたしがナバルの手から受けた侮辱に報いて、しもべが悪をおこなわないうにされた。主はナ

パルの悪行をそのこうべに報いられたのだ」。ダビデはアビガイルを妻にめとろうと、人をつかわして彼女に申し込んだ。四〇ダビデのしもべたちはカルメルにいるアビガイルの所にきて、彼女に言った、「ダビデはあなたを妻にめとろうと、われわれをあなたの所へつかわしたのです」。四一アビガイルは立ち、地にひれ伏し拝して言った、「はしためは、わが君のしもべたちの足を洗うつかえめです」。四二アビガイルは急いで立ち、ろばに乗って、五人の侍女たちを連れ、ダビデの使者たちに従って行き、ダビデの妻となった。

四三ダビデはまたエズレルのアヒノアムをめとった。彼女たちはふたりともダビデの妻となった。四四ところでサウルはその娘、ダビデの妻ミカルを、ガリムの人であるライシの子パルテに与えた。

第二六章 一そのころジフびとがギベアにおるサウルのもとにきて言った、「ダビデは荒野の前にあるハキラの山に隠れているではありませんか」。二サウルは立つて、ジフの荒野でダビデを捜すために、イスラエルのうちから選んだ三千人をひき連れて、ジフの荒野に下った。三サウルは荒野の前の道のかたわらにあるハキラの山に陣を取った。ダビデは荒野にとどまっていたが、サウルが自分のあとを追って荒野にきたのを見て、四斥候を出し、サウルが確かにきたのを知った。五そしてダビデは立つて、サウルが陣を取っている所へ行って、サウ

ルとその軍の長、ネルの子アブネルの寝ている場所を見た。サウルは陣所のうちに寝ていて、民はその周囲に宿営していた。

六ダビデは、ヘテびとアヒメレク、およびゼルヤの子で、ヨアブの兄弟であるアビシヤイに言った、「だれがわたしと共にサウルの陣に下って行くか」。アビシヤイは言った、「わたしが一緒に下って行きます」。七こうしてダビデとアビシヤイとが夜、民のところへ行ってみると、サウルは陣所のうちに身を横たえて寝ており、そのやりは枕もとに地に突きさしてあった。そしてアブネルと民らとはその周囲に寝ていた。八アビシヤイはダビデに言った、「神はきよう敵をあなたの手に渡されました。どうぞわたしに、彼のやりをもってひと突きで彼を地に刺しとおさせてください。ふたたび突くには及びません」。九しかしダビデはアビシヤイに言った、「彼を殺してはならない。主が油を注がれた者に向かつて、手をのべ、罪を得ない者があるうか」。一〇ダビデはまた言った、「主は生きておられる。主が彼を撃たれるであろう。あるいは彼の死ぬ日が来るであろう。あるいは戦いに下って行って滅びるのであるう。二主が油を注がれた者に向かつて、わたしが手をのべることを主は禁じられる。しかし今、そのまくらもとにあるやりと水のびんを取りなさい。そしてわれわれは去ろう」。三こうしてダビデはサウルの枕もとから、やりと水のびんを取って彼らは去ったが、

だれもそれを見ず、だれも知らず、また、だれも目をさまさず、みな眠っていた。主が彼らを深く眠らされたからである。

三ダビデは向こう側に渡って行って、遠く離れて山の頂に立った。彼らの間の隔たりは大きかった。四ダビデは民とネルの子アブネルに呼ばわって言った、「アブネルよ、あなたは答えないのか」。アブネルは答えて言った、「王を呼んでいるあなたはだれか」。五ダビデはアブネルに言った、「あなたは男ではないか。イスラエルのうちに、あなたに及ぶ人があるうか。それであるのに、どうしてあなたは主君である王を守らなかったのか。民のひとり、あなたの主君である王を殺そうとして、はいりこんだではないか。六あなたがしたこの事は良くない。主は生きておられる。あなたがたは、まさに死に値する。主が油をそがれた、あなたの主君を守らなかったからだ。いま王のやりがどこにあるか。その枕もとにあった水のびんがどこにあるかを見なさい」。

七サウルはダビデの声を聞きわけて言った、「わが子ダビデよ、これはあなたの声か」。ダビデは言った、「王、わが君よ、わたしの声です」。八ダビデはまた言った、「わが君はとうしてしもべのあとを追われるのですか。わたしが何をしたのですか。わたしの手になんのわるいことがあるのですか。九王、わが君よ、どうぞ、今しもべの言葉を聞いてください。もし主があなたを動かして、

わたしの敵とされたのであれば、どうぞ主が供え物を受けて和らいでくださるように。もし、それが人であるならば、どうぞその人々が主の前にのろいを受けるように。彼らが『おまえは行って他の神々に仕えなさい』と言って、きょう、わたしを追い出し、主の嗣業にあずかることができないようにしたからです。二〇それゆえ今、主の前を離れて、わたしの血が地に落ちることのないようにしてください。イスラエルの王は、人が山で、しゃを追うように、わたしの命を取ろうとして出てこられたのです」。

三その時、サウルは言った、「わたしは罪を犯した。わが子ダビデよ、帰ってきてください。きょう、わたしの命があなたの目に尊く見られたゆえ、わたしは、もはやあなたに害を加えないであろう。わたしは愚かなことをして、非常なまちがいをした」。四ダビデは答えた、「王のやりは、ここにあります。ひとりの若者に渡ってこさせ、これを持ちかえらせてください。五主は人おののにその義と真実とに従って報いられます。主がきょう、あなたをわたしの手に渡されたのに、わたしは主が油を注がれた者に向かつて、手をのべることをしなかったのです。六きょう、わたしがあなたの命を重んじたように、どうぞ主がわたしの命を重んじて、もろもろの苦難から救い出してください。七サウルはダビデに言った、「わが子ダビデよ、あなたはほむべきかな。あなたは



多くの事をおこなって、それをなし遂げるであろう」。こうしてダビデはその道を行き、サウルは自分の所へ帰った。

**第二十七章** 「ダビデは心のうちに言った、「わたしは、いつかはサウルの手にかかつて滅ぼされるであろう。早くペリシテびとの地へのがれるほかはない。そうすればサウルはこの上イスラエルの地にわたしをくまなく捜すことはやめ、わたしは彼の手からのがれることができるであろう」。こゝうしてダビデは、共にいた六百人と一緒に、立つてガテの王マオクの子アキシの所へ行つた。ミダビデと従者たちは、おのおのその家族とともに、ガテでアキシと共に住んだ。ダビデはそのふたりの妻、すなわちエズレルの女アヒノアムと、カルメルの女でナバルの妻であつたアビガイルと共におつた。四ダビデがガテにのがれたことがサウルに聞えたので、サウルはもはや彼を捜さなかつた。

五さてダビデはアキシに言った、「もしわたしがあなたの前に恵みを得るならば、どうぞ、いなかにある町のうちで一つの場所をわたしに与えてそこに住まわせてください。どうしてもべがあなたと共に王の町に住むことができませんか」。六アキシはその日チクラグを彼に与えた。こゝうしてチクラグは今日にいたるまでユダの王に属している。七ダビデがペリシテびとの国に住んだ日の数は一年と四か月であつた。

八さてダビデは従者と共にのぼって、ゲシユルびと、ゲゼルびとおよびアマレクびとを襲つた。これらは昔からシユルに至るまでの地の住民であつて、エジプトに至るまでの地に住んでいた。九ダビデはその地を撃つて、男も女も生かしおかず、羊と牛とろばとらくだと衣服とを取つて、アキシのもとに帰つてきた。一〇アキシが「あなたはきょうどこを襲いましたか」と尋ねると、ダビデは、その時々、「ユダのネゲブです」、「エラメルびとのネゲブです」、「ケニびとのネゲブです」と言つた。二ダビデは男も女も生かしおかず、ひとりをもガテに引いて行かなかつた。それはダビデが、「恐らくは、彼らが、『ダビデはこうした』と言つて、われわれのことを告げるであろう」と思つたからである。ダビデはペリシテびとのいなかに住んでいる間はこゝうするのが常であつた。三アキシはダビデを信じて言つた、「彼は自分を全くその民イスラエルに憎まれるようにした。それゆゑ彼は永久にわたしのしもべとなるであろう」。

**第二十八章** 「そのころ、ペリシテびとがイスラエルと戦おうとして、いくさのために軍勢を集めたので、アキシはダビデに言つた、「あなたは、しかと承知してください。あなたとあなたの従者たちとは、わたしと共に出て、軍勢に加わらなければなりません」。二ダビデはアキシに言つた、「よろしい、あなたはしもべが何をするかを知られるでしょう」。アキシはダビデに言つた、「よろ

しい、あなたを終身わたしの護衛の長としよう」。

三 さてサムエルはすでに死んで、イスラエルのすべての人は彼のために悲しみ、その町ラマに葬った。また先にサウルは口寄せや占い師をその地から追放した。四 ペリシテびとが集まってきてシユネムに陣を取ったので、サウルはイスラエルのすべての人を集めて、ギルボアに陣を取った。五 サウルはペリシテびとの軍勢を見て恐れ、その心はいたくおののいた。六 そこでサウルは主の伺いをたてたが、主は夢によっても、ウリムによっても、預言者によっても彼に答えられなかった。七 サウルはしもべたちに言った、「わたしのために、口寄せの女を捜し出しなさい。わたしは行ってその女に尋ねよう」。しもべたちは彼に言った、「見よ、エンドルにひとりの口寄せがいます」。

八 サウルは姿を変えてほかの着物をまとい、ふたりの従者を伴って行き、夜の間に、その女の所にきた。そしてサウルは言った、「わたしのために口寄せの術を行って、わたしがあなたに告げる人を呼び起してください」。九 女は彼に言った、「あなたはサウルがしたことをごぞんじでしょう。彼は口寄せや占い師をその国から断ち滅ぼしました。どうしてあなたは、わたしの命にわなをかけて、わたしを死なせようとするのですか」。一〇 サウルは主をさして彼女に誓って言った、「主は生きておられる。この事のためにあなたが罰を受けることはないでしょう」。

二 女は言った、「あなたのためにだれを呼び起しましょうか」。サウルは言った、「サムエルを呼び起してください」。三 女はサムエルを見た時、大声で叫んだ。そしてその女はサウルに言った、「どうしてあなたはわたしを欺かれたのですか。あなたはサウルです」。四 王は彼女に言った、「恐れることはない。あなたには何が見えるのですか」。女はサウルに言った、「神のようなかたが地からのぼられるのが見えます」。五 サウルは彼女に言った、「その人はどんな様子をしていますか」。彼女は言った、「ひとりの老人がのぼってこられます。その人は上着をまとっておられます」。サウルはその人がサムエルであるのを知り、地にひれ伏して拝した。

六 サムエルはサウルに言った、「なぜ、わたしを呼び起して、わたしを煩わすのか」。サウルは言った、「わたしは、ひじょうに悩んでいます。ペリシテびとがわたしに向かつていくさを起し、神はわたしを離れて、預言者によっても、夢によっても、もはやわたしに答えられないのです。それで、わたしのすべきことを知るために、あなたを呼びました」。七 サムエルは言った、「主があなたを離れて、あなたの敵となられたのに、どうしてあなたはわたしに問うのですか」。八 主は、わたしによって語られたとおりあなたに行われた。主は王国を、あなたの手から裂きはなして、あなたの隣人であるダビデに与えられた。九 あなたは主の声に聞き従わず、主の激しい怒

りに従つて、アマレクびとを撃ち滅ぼさなかつたゆえに、主はこの事を、この日、あなたに行われたのである。二主はまたイスラエルをも、あなたと共に、ベリシテびとの手に渡されるであろう。あすは、あなたもあなたの子らもわたしと一緒になるであろう。また主はイスラエルの軍勢をもベリシテびとの手に渡される」。

三〇そのときサウルは、ただちに、地に伸び、倒れ、サムエルの言葉のために、ひじょうに恐れ、またその力はうせてしまった。その一日一夜、食物をとっていなかったからである。三女はサウルのもとにきて、彼のおのいてゐるのを見て言った、「あなたのつかえめは、あなたの声に聞き従い、わたしの命をかけて、あなたの言われた言葉に従いました。三それゆえ今あなたも、つかえめの声に聞き従い、一口のパンをあなたの前にそなえさせてください。あなたはそれをめしあがつて力をつけ、道を行ってください」。三三ところがサウルは断つて言った、「わたしは食べません」。しかし彼のしもべたちも、その女もしいてすすめたので、サウルはその言葉を聞きいれ、地から起きあがり、床の上にすわった。三四その女は家に肥えた子牛があつたので、急いでそれをほふり、また麦粉をとり、こねて、種入れぬパンを焼き、三五サウルとそのしもべたちの前に持ってきたので、彼らは食べた。そして彼らは立ち上がって、その夜のうちに去った。

## 第二十九章

一さてベリシテびとは、その軍勢をこ

とごとくアベクに集めた。イスラエルびとはエズレルにある泉のかたわらに陣を取った。二ベリシテびとの君たちは、あるいは百人、あるいは千人を率いて進み、ダビデとその従者たちはアキシと共に、しんがりになって進んだ。三その時、ベリシテびとの君たちは言った、「これらのヘブルびとはここで何をしているのか」。アキシはベリシテびとたちに言った、「これはイスラエルの王サウルのしもべダビデではないか。彼はこの日ごろ、この年ごろ、わたしと共にいたが、逃げ落ちてきた日からきょうまで、わたしは彼にあやまちがあつたのを見たことがない」。四しかしベリシテびとの君たちは彼に向かつて怒った。そしてベリシテびとの君たちは彼に言った、「この人を帰らせて、あなたが彼を置いたもとの所へ行かせなさい。われわれと一緒に彼を戦いに下らせてはならない。戦いの時、彼がわれわれの敵となるかも知れないからである。この者は何をもってその主君とやわらぐことができようか。ここにゐる人々の首をもってするほかはあるまい。五これは、かつて人々が踊りのうちに歌いかわして、

『サウルは千を撃ち殺し、

ダビデは万を撃ち殺した』

と言つた、あのダビデではないか」。

六そこでアキシはダビデを呼んで言った、「主は生きておられる。あなたは正しい人である。あなたがわたしと



一緒に戦いに出入りすることをわたしは良いと思つてゐる。それはあなたがわたしの所にきた日からこの日まで、わたしは、あなたに悪い事があつたのを見たことがないからである。しかしペリシテびとの君たちはあなたを良く言わない。それゆゑ今安らかに歸つて行きなさい。彼らが悪いと思うことはしないがよからう。ハダビデはアキシに言つた、「しかしわたしは何をしたというのですか。わたしがあなたに仕えはじめた日からこの日まで、あなたはしもべの身に見られたので、わたしは行つて、わたしの主君である王の敵と戦ふことができないのですか」。アキシはダビデに答へた、「わたしは見て、あなたが神の使のようになりつばな人であることを知つてゐる。しかし、ペリシテびとの君たちは、『われわれと一緒に彼を戦いに上らせてはならない』と言つてゐる。それで、あなたは、一緒にきたあなたの主君のしもべたちと共に朝早く起きなさい。そして朝早く起き、夜が明けてから去りなさい」。二こうしてダビデとその従者たちとは共にペリシテびとの地へ歸ろうと、朝早く起きて出立したが、ペリシテびとはエズレルへ上つて行つた。

第三〇章 一さてダビデとその従者たちが三日目にチクラグにきた時、アマレクびとはすでにネゲブとチクラグを襲つてゐた。彼らはチクラグを撃ち、火をはなつてこれを焼き、二その中にいた女たちおよびすべての者を捕虜にし、小さい者をも大きい者をも、ひとりも

殺さずに、引いて、その道に行つた。三ダビデと従者たちはその町にきて、町が火で焼かれ、その妻とむすこ娘らは捕虜となつたのを見た。四ダビデおよび彼と共にいた民は声をあげて泣き、ついに泣く力もなくなつた。五ダビデのふたりの妻すなわちエズレルの女アヒノアムと、カルメルびとナバルの妻であつたアビゲイルも捕虜になつた。六その時、ダビデはひじょうに悩んだ。それは民がみなおのおのそのむすこ娘のために心を痛めたため、ダビデを石で撃とうと言つたからである。しかしダビデはその神、主によつて自分を力づけた。

七ダビデはアヒメレクの子、祭司アビヤタルに、「エポデをわたしのところに持つてきなさい」と言つたので、アビヤタルは、エポデをダビデのところに持つてきた。八ダビデは主に伺いをたてて言つた、「わたしはこの軍隊のあとを追うべきですか。わたしはそれに追いつくことができましようか」。主は彼に言われた、「追いなさい。あなたは必ず追いついて、確かに救ひ出すことができるであらう」。九そこでダビデは、一緒にいた六百人の者と共に出立してベソル川へ行つたが、あとに残る者はそこにとどまつた。一〇すなわちダビデは四百人と共に追撃をつづけたが、疲れてベソル川を渡れない者二百人はとどまつた。

二彼らは野で、ひとりのエジプトびとを見て、それをダビデのもとに引いてきて、パンを食べさせ、水を飲ま

せた。三また彼らはほしいちじくのかたまり一つと、ほしどう二ふさを彼に与えた。彼は食べて元気を回復した。彼は三日三夜、パンを食べず、水を飲んでいなかったからである。三ダビデは彼に言った、「あなたはだれのものが。どこからきたのか」。彼は言った、「わたしはエジプトの若者で、アマレクびとの奴隷です。三日前にわたしが病氣になったので、主人はわたしを捨てて行きました。四わたしどもは、ケレテびとのネゲブと、ユダに属する地と、カレブのネゲブを襲い、また火でチクラグを焼きはらいました」。二五ダビデは彼に言った、「あなたはその軍隊のところへわたしを導き下してくれるか」。彼は言った、「あなたはわたしを殺さないこと、またわたしを主人の手に渡さないことを、神をさしてわたしに誓ってください。そうすればあなたをその軍隊のところへ導き下りましょう」。

二六彼はダビデを導き下ったが、見よ、彼らはベリシテびとの地とユダの地から奪い取ったさまざまな多くのぶんどり物のゆえに、食い飲み、かつ踊りながら、地のおもてにあまねく散りひろがっていた。二七ダビデは夕ぐれから翌日の夕方まで、彼らを撃ったので、らくだに乗って逃げた四百人の若者たちのほかには、ひとりものかれた者はなかった。二八こうしてダビデはアマレクびとが奪い取ったものをみな取りもどした。またダビデはそのふたりの妻を救い出した。二九そして彼らに属するものは、

小さいものも大きいものも、むすこも娘もぶんどり物も、アマレクびとが奪い去った物は何をも失わないで、ダビデがみな取りもどした。三〇ダビデはまたすべての羊と牛を取った。人々はこれらの家畜を彼の前に追って行きながら、「これはダビデのぶんどり物だ」と言った。

三そしてダビデが、あの疲れてダビデについて行くことができずに、ベツル川のほとりにとどまっていた二百人の者のところへきた時、彼らは出てきてダビデを迎え、またダビデと共にいる民を迎えた。ダビデは民に近づいてその安否を問うた。三そのときダビデと共に行った人のうちで、悪く、かつよこしまな者どもはみな言った、「彼らはわれわれと共に行かなかったのだから、われわれはその人々にわれわれの取りもどしたぶんどり物を分け与えることはできない。ただおのおのにその妻子を与えて、連れて行かせましょう」。三しかレダビデは言った、「兄弟たちよ、主はわれわれを守って、攻めてきた軍隊をわれわれの手に渡された。その主が賜ったものを、あなたがたはそのようにしてはならない。二四だれがこの事について、あなたがたに聞き従いますか。戦いに下って行った者の分け前と、荷物のかたわらにとどまっていた者の分け前を同様にしなければならぬ。彼らはひとしく分け前を受けべきである」。二五この日以来、ダビデはこれをイスラエルの定めとし、おきてとして今日に及んでいる。

二六ダビデはチクラグにきて、そのぶんどり物の一部をエダの長老である友人たちにおくって言った、「これは主の敵から取ったぶんどり物のうちからあなたがたにおくる贈り物である」。二七そのおくり先は、ベテルにいる人、ネゲブのラモテにいる人々、ヤッテルにいる人々、二八アロエルにいる人々、シフモテにいる人々、エシモアにいる人々、ラカルにいる人々、二九エラメルびとの町町にいる人々、ケニびとの町々にいる人々、三〇ホルマにいる人々、ボラシヤンにいる人々、アタクにいる人々、三一ヘbronにいる人々、およびダビデとその従者たちが、さまよい歩いたすべての所にいる人々であった。

第三章 一 一 さてベリシテびとはイスラエルと戦った。イスラエルの人々はベリシテびとの前から逃げ、多くの者は傷ついてギルボア山にたおれた。二ベリシテびとはサウルとその子らに攻め寄り、そしてベリシテびとはサウルの子ヨナタン、アピナダブ、およびマルキシエアを殺した。三戦いは激しくサウルに迫り、弓を射る者どもがサウルを見つけて、彼を射たので、サウルは射る者たちにひどい傷を負わされた。四そこでサウルはその武器を執る者に言った、「つるぎを抜き、それをもつてわたしを刺せ。さもないと、これらの無割礼の者どもがきて、わたしを刺し、わたしをなぶり殺しにするであらう」。しかしその武器を執る者は、ひじょうに恐れて、

それに応じなかった。サウルは、つるぎを執って、その上に伏した。五武器を執る者はサウルが死んだのを見て、自分もまたつるぎの上に伏して、彼と共に死んだ。六こうしてサウルとその三人の子たち、およびサウルの武器を執る者、ならびにその従者たちは皆、この日共に死んだ。七イスラエルの人々で、谷の向こう側、およびヨルダンの向こう側にいる者が、イスラエルの人々の逃げるのを見、またサウルとその子たちの死んだのを見て町々を捨てて逃げたので、ベリシテびとはきてその中に住んだ。

八あくる日、ベリシテびとは殺された者から、はぎ取るためにきたが、サウルとその三人の子たちがギルボア山にたおれているのを見つけた。九彼らはサウルの首を切り、そのよろいをはぎ取り、ベリシテびとの全地に人をつかわして、この良い知らせを、その偶像と民とに伝えさせた。一〇また彼らは、そのよろいをアシタロテの神殿に置き、彼のからだをベテシヤンの城壁にくぎづけにした。二ヤベシ・ギレアデの住民たちは、ベリシテびとがサウルにした事を聞いて、三勇士たちはみな立ち、夜もすがら行って、サウルのからだを、その子たちのからだをベテシヤンの城壁から取りおろし、ヤベシにきて、これをそこで焼き、四その骨を取って、ヤベシのぎよりゅうの木の下に葬り、七日の間、断食した。